

忘れられた女性変革者たち

——フランス経済誌が選んだ 20 人——

中 川 辰 洋

目次

はじめに

1. “大いなる沈黙 (Die große Stille)” を打ち破れ
2. 女性と政治——一斑を見て全貌を卜すべからず：フランシス・パーキンス、セシル・カーン、シュザンヌ・ラコール、イレース・ジョリオ＝キュリー
3. 経済・経営思想における女性たちの営み：ローザ・ルクセンブルク、ジョーン・ロビンソン、メアリー・パーカー・フォレット、スーザン・ストレンジ
4. 企業の再生——ビジネスに情熱を燃やす女性たち：オリーヴ・ド・レストナック、マルグリット・ブレーキー、マダム・ド・マレーズ、アメリ・ド・ディートリック
5. 銀行業・金融業——全米初の女性銀行家は黒人コミュニティー出身：マギー・リーナ・ドレイパー・ミッチェル・ウォーカー、ヘティー・グリーン、マルト・マリ・アノー
6. 労働・社会運動の女性活動家たち：ジャンヌ・ブーヴィエ、リュシー・オブラック
7. 製品開発——発明は日常生活のなかから：エリザベス・“リジー”・マギー、メリタ・ベンツ、アイダ・ローゼンタール

結びにかえて——ベアトリス・クレイグのインタビューに寄せて

参考文献

「数学は、たとえ最高に洗練された方程式だって、人間社会の恐ろしい現実には比べれば、はるかにシンプルだ。現実には秩序もへったくれもない。人間が計算の要素に入った瞬間、確固たる基準がなくなってしまうのだ」

——スーザン・E.マクニール『スコットランドの危険なスパイ』

はじめに

本稿は、いまや発行部数100万部を超え世界主要国で多くの読者に支持されるフランスの総合経済誌 *Alternatives Économiques*——通称 *Alter Éco* (2020年7・8月合併号) に収録されたスペシャルレポート “Ces femmes qui ont transformé l'économie et ont été oubliées” を紹介することを目標とする。オリジナルタイトルは「経済を変革するも忘れられた女性たち」ほどの意味である。だが、やがて明らかにするように、このレポートには経済学や経営学の分野だけでなく、政治、労働運動、企業経営や技術革新・発明などさまざまな分野における社会変革のプロセスに携わった女性たちもふくまれることから、あえて「忘れられた女性変革者たち」と訳出したしだいである。

そのさい、筆者が大学院時代に読んだエドウィン・セリグマンの名著 *On Some Neglected Economists* (邦訳『忘れられた経済学者たち』) が頭になかったとはいえない。それにいま一つ、本稿の英文タイトル “These twenty transformers” がじつのところアメリカの文豪ウィリアム・フォークナー唯一の短編集 *These Thirteen* (邦訳『これら十三篇』) に着想を得たものであることを告白しなければならない。そうとはいえ、いかな読者諸賢といえども、このタイトルだけでは、海のものと山のものとも判断がつかないであろうから、“They had been neglected *puisque they were women*” というサブタイトルを充てたしだいである。

前口上はこのくらいにして先を急ごう。ここで紹介するレポートの著者クリスチャン・シャヴァニユは、ソルボンヌ＝パンテオン、LSE (ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス) で学んだのち、経済企画庁 (Commissariat général du plan)——現 France Stratégie (国立戦略問題研究所)——や仏金融大手ソシエ

テ・ジェネラル銀行 (Société Générale) などを経て本誌の編集者・ライターとして活躍するジャーナリストである。本文の大半はシャヴァニウの手になるものであるが、一部本誌の協力者で研究者のマルク・ムシの寄稿文、それにカナダ・ケベック大学で久しく教鞭を執っていたジル・ドスタレールが本誌に連載した経済思想史の諸論稿——のちに *Les grands auteurs de la pensée économique* (経済思想の偉大な著述家たち) のタイトルで出版——からの抜粋もふくまれる。そしてシャヴァニウのレポートを総括するかたちで、カナダ・オタワ大学名誉教授ベアトリス・クレイグ (歴史学) のインタビューが掉尾を飾る。

シャヴァニウのいうように、多くの女性たちは、それがたとえ「目に見えない (invisible)」にしても、経済生活のなかで重要な位置を占めている。しかもその時代その時代に、かれらの出身国や経済の歴史のなかでキーパーソンとして活躍した者も決してすくなくない。それにもかかわらず、われわれはそうした人間たちを知らないばかりか、その名さえ一度も聞いたことがない者も一人や二人ではない。理由はただ一つ、女性たちだからである (p. 21)。

それゆえ、このレポートのテーマは、冥府に下った者たち (の靈魂) がレテの川 (Léthé) の水を両の手で掬って口に含み生前の記憶を忘れたかのような“大いなる沈黙 (Die große Stille)”の支配する世界からかの女性たちを連れ出し本来あるべき場所にもどすこと、つまりかれらの人となりや功績を正當に (再) 評価するところにある。けれども、無念ではあるが数には限りがある。シャヴァニウは経済研究、政治活動、企業経営、金融業、労働・社会運動そして発明の 6 つの分野から 20 人の女性たちをピックアップした。

読者諸賢のなかには 20、たった 20 か——と数字にご不満の向きもあるかと思われるが、その一人ひとりについて知れば、かならずや不満は解消されるものと確信する。何よりもまず、シャヴァニウ自身がある意味では「無謀な」試みであることを重々承知していたとみえて、関連する文献や資料を参照文献としてリストアップしている。興味のある向きは、シャヴァニウが取り上げた書籍や論稿をベースに筆者の作成した末尾の「参考文献」を手掛かりにこの分野の知識を広め深めていただきたい。

なお、以下では煩雑さを避けるためシャヴァニユウのレポートからの引用を示すレフェランス注を省略したことをあらかじめお断りしておく。

1. “大いなる沈黙 (Die große Stille)” を打ち破れ

クリスチャン・シャヴァニユウのいうように、太古の昔といわず、近現代に限ってみても、政治・経済・社会のさまざまな分野で女性たちが男性たちとともに活躍したことは知られているが、かれらを正面切って語ることはまれであった。例えば、フランシス・パーキンス、ローザ・ルクセンブルク、ジョーン・ロビンソン、メアリー・パーカー・フォレットは一度や二度その名を耳にしたことがあると答える男性諸君は多かろう。ところが、オリーフ・ド・レストナック、ジャンヌ・ブーヴィエ、マギー・リーナ・ウォーカー、アイダ・ローゼンタールとなると、名前はおろか存在そのものを知る者はまれである。

昨今の研究のトレンドは、フェミニズムやジェンダー不平等の是正といった実践的アプローチに限ることなく、政治や経済や社会の分野で活躍した女性たちの功績を歴史的資料やデータにもとづき再評価して本来あるべき場所に復帰させること、あるいは何世紀にもわたってかれらを飲み込んだ“大いなる沈黙”から連れ出して舞台の中央にふたたび立たせることを目標とするものもすくなくない。本稿で取り上げたシャヴァニユウのレポートはそうした歴史実証アプローチの研究成果を紹介したものといつてよい。

例を挙げれば、ジャン＝ルイ・ドブレとヴァレリー・ボシェネックの共著『フランスを目覚めさせた女性たち』(2013年)、ベアトリス・クレイグの『女性とビジネスの世界——1500年から現代』(2019年)、マーガレット・マルアーニとモニーク・ムロンの共作『フランスにおける女性労働の一世紀』(2020年)といった研究書だけでなく、ゾリーナ・カーンが全米経済研究所(NBER)から発表したワーキングペーパー「目に見えない女性たち——産業化初期のフランスにおける企業家活動、革新そして家族経営」(2015年)などが、それである(詳細は本稿末尾の参考文献を参照されたい)。

いずれも多くの読者を獲得し女性史やフェミニズムの研究に大きな影響をあたえたといつてよい。このうちカーン論文のタイトル「目に見えない女性たち」とは、とりも直さず、歴史の「隅に追いやられた女性たち (femmes marginalisées)」の謂いである。いい換えれば、いうところの「男性中心思考 (vision masculino-centrée)」によって語られてきた政治や経済の歴史研究に反省を促すものであり、女性は男性の影法師、先を行く男の影を踏まないようにつねに三步下がって歩くというような思考への有力な反証と考えてよいであろう。

だが、「隅に追いやられた女性たち」を本来あるべき場所に連れもどすことは、ありていにいうと、世界の歴史を言葉の正しい意味でグローバルに見直すことでなければならない。それは、「西洋中心思考 (vision occidento-centrée)」から距離を置き、自余の世界——西洋世界よりもはるかに広く多様な世界——における見聞を後世に伝えることに似ている。つまり、クリストファー・コロンブスの新大陸発見に至る 10 世紀余の間の大発見は洋の東西を問わず存在していたにもかかわらず、18 世紀イギリスを代表する思想家デイヴィッド・ヒュームを気取って「西尊東卑」を振り翳して物申せば、「東洋世界」における発見が「西洋世界」のそれに劣ると見做されて等閑視され、結果として女性たちと同様に「隅に追いやられた」のであった。そしてこのような世界観はコロンブス後の「西洋世界」による新大陸やアジア・アフリカ諸国の植民地支配を正統化するロジックにすり替えられた。別言すれば、女性が男性に劣るように、東洋やアフリカや新大陸の人間たちは西洋の人間に劣るというしだいである。

女性たちが人間とは看做されなかった 19 世紀はもとより、20 世紀に入っても女性の男性への従属が正統化されたのはけだし当然であった。例えば、フランスでは 1938 年まで一般家庭における妻の権利は夫のそれに従属し、妻が起業し銀行からの融資を組むうえでさまざまな制約が課せられていた。もっとも同じ女性でも寡婦はその限りではなく、古来起業し事業を成功へと導いた女性たちは、“シャトー・マルゴの貴婦人 (Dame du Château Margot)”ことオリーヴ・ド・レストナック、最高級シャンパーニュの“ヴーヴ・クリコ (Veuve Clicquot)”の創業者マダム・〔バルブ＝ニコール・〕クリコがそうであるように、寡婦たち

である。見方を変えていうなら、かれらこそが真の「革新的」企業者、事業家であり、とくに中小・零細家族経営企業の場合はそうだった。

もちろん、既婚女性——（専業）主婦であってもビジネスを成功させたケースはあるにはある。ただそのような事例が目に見えて増加しなかったのは、家族や債権者や税務当局も女性たちが利益を生み出す企業の経営の任に堪えるだけの能力を有するとは考えず、女性起業者や経営者をのぞまなかったという事実が無言の圧力として女性たちを圧迫していたからにほかならない。その意味からすれば、女性による経済活動のありようをトータルに理解することが長いこと妨げられてきたわけである。

しかしながら幸いなことに、そのような理不尽な状況は終わろうとしている。カナダ・オタワ大学で長年歴史学を講義していたベアトリス・クレイグが、一連の研究成果を集大成するかたちで女性経済史資料を編纂し刊行した。これが前掲『女性とビジネスの世界』である。クレイグの業績により、1500年代から約500年間のヨーロッパや北アメリカの働く女性たちを梗概することが可能となったことは喜ばしい限りである。

すなわち、われわれは今日に至るも市場や被服・布地の店舗で売り子として働いている女性たちをなんの変哲もなく見ている。ところが15、6世紀このかた、女性たちは書籍の製本職人として活躍していたし、ワインやビールの醸造・販売、さらには貿易商社を経営する者さえ存在した。かれらはいわば当時のグローバル化の一部を組織・編成する機能と役割を担っていたのである。ばかりか、かれらは数えきれないほどの銀行や金融業者と手を組んで産業革命期の投資家や起業者たちに資金を融通し、政府証券（公債）を引き受け、金融・証券市場の成長に寄与した。あまつさえ、当時としてはかなりリスクな投資、つまり投機的取引（speculative deals）に手を染めることも厭わなかった。いうところの相場師（spéculatrices）である。

要するに、フランスの作家にして大司教にまで登りつめたフランソワ・フェヌロンが1687年に著した『婦女子教育論（*Traité de l'éducation des filles*）』のなかで説いた「婦女子が事業に熱中することはこれを厳に慎むべきである」の教

えに従わない女性たちがあまた存在したということである。とりわけ寡婦たちがそうであり、かれらのなかに起業者や企業経営者がすくなくなかった。

さらに時代が下って 18 世紀、時の時代精神 (Zeitgeist) である啓蒙思想の代表的思想家であるヴォルテールにしてからが、自身の『哲学辞典 (*Dictionnaire philosophe*)』のなかで、きわめて知性的で困難な問題に果敢に取り組む女性たちがすくなく存在することを認めるのにやぶさかではないとはいえ、だからといってかれらが「創意工夫や発明の才に恵まれた存在であるとはいえない」と言い切っている。かれの謂いを証明する当時の特許関連の統計資料がないのでなんともいえないものの、ゾリーナ・カーンによれば、1791 年から 1845 年の間に女性たちによる特許申請は数千件に上り、全体の 1.5% から 3% を占めていたという。

もちろん、ここでフェヌロンやヴォルテールの言説を論難するつもりは毛頭ない。むしろ問われるべきは、政治や経済の世界はもとより、市民社会や労働組合や NGO (非政府組織) などの生成・発展にともなう女性史はこれを中長期の視点からあらためて論じなければならないということである。紙幅は限られているが、以下、政治、経済、企業経営と金融、社会・労働運動そして発明・製品開発の 6 つの分野における女性たちの活動をみていくことにしたい。

2. 女性と政治——一斑を見て全貌をトすべからず

1930 年代大西洋の兩岸のアメリカ合衆国とフランスの二つの国でほぼ同じ時期に歴史上はじめて女性閣僚が誕生した。19 世紀来の女性参政権拡大運動が一定程度実を結び、女性が国政選挙の投票所に足を運ぶようになったのが第 1 次世界大戦後のことであるから、女性閣僚の誕生は政治に「革命」をもたらすはずであった。だが、政治革命は「流産」した。女性が政治の表舞台で本格的に活躍する時代の到来にはさらに 20 年以上の歳月を要することになる。

洋の東西と問わず「一斑を見て全貌をトすべからず」に類する警句がある。例えば、フランスでは“Une hirondelle ne fait pas un printemps”といい、英語圏で

も“*One swallow doesn't make a summer*”という成句がある。のちに詳述するように、フランクリン・ローズベルトのアメリカでは女性の閣僚が1名であったのに対して、レオン・ブルム内閣のフランスで誕生した女性閣僚は3名であった。シャヴァニユは、ジャーナリストのルイズ・ワイスを引いて、後三者を「人民戦線内閣の3羽のツバメ (*les trois hirondelles du Front populaire*)」に喩え、1羽どころか3羽のツバメが飛来しても「春(または夏)は来なかった」、つまり3人の女性閣僚が誕生しても女性たちが男性たちとともに政治のセンターステージで活躍する時代は到来しなかったといって嘆いてみせた。

フランシス・パーキンス (1880-1965)

フランクリン・デラノ・ローズベルトは大統領就任直前の1933年2月フランシス・パーキンスを労働長官に任命した。彼女の長官としての回想録『わたしの知るローズベルト (*The Roosevelt I Knew*)』によると、大統領は女性初の労働長官を「かれの政権の確固たる象徴」と考えていたという。だが、パーキンスは引き受けるからには「象徴」——あるいは「お飾り」ではなく「確固たる変革者」として仕事をする決意をしていた。後日一葉の用紙を携えてローズベルトの前に立ち現れたが、それには彼女の目指す変革のメニューが^{したた}認められていた。すなわち、失業保険、大規模公共事業プログラム、最低賃金、労働時間短縮、児童労働廃止、労働安全衛生のための新たなルール、公的年金サービスなどである。

ローズベルト大統領は一読して「これだけ大胆な施策はこの国で実施されたためしがなかったことを君も知っているだろうね」と問い質したという。いわれるまでもなく、パーキンスにはこれが彼女の生涯をかけた闘いになる(であろう)ことを予期していた。そして最後まで戦い果せた。パーキンス長官がローズベルト政権の屋台骨を支えたもっとも影響力のある閣僚と称されたのもゆえなしとしない。

ファニー・コラリー(のちフランシス)・パーキンスは1880年4月10日、マサチューセッツ州ボストンで文具商を営む中産階級家庭に生まれた。父は教

育に熱心で、当時としてはまれであったが、幼年期を過ごしたウスターのマウン・ホリヨーク女子学校に娘を進学させた。娘は父親の期待によく応え成績優秀であったけれども、父親が娘の将来に配慮して物理・化学の専攻を希望したのに対して、当の娘はアメリカ経済史に惹かれ、担当教員の企画した工場見学などに進んで参加した。

ファニー・パーキンスは1904年に自然科学の教員としてイリノイ州シカゴの女学校に赴任した。ここで彼女は結婚を機に改名し“フランシス”と名乗るようになった（ただし苗字はそのまま）。3年後の1907年にはペンシルヴェニア州の州都フィラデルフィアに移って職業も変え、労働保護や児童労働の廃止などの社会活動に参加するようになる。さらに、1910年にコロンビア大学が女性に門戸を開放したのを機に、彼女は活動の資格を得るために政治学を学び修士号を取得した。その後、彼女は工場労働者の労働条件の改善や貧しい女性や子供たちの支援、さらには女性参政権拡大のための闘いに尽力した。

フランシス・パーキンスは労働条件の抜本的改革を実現するためには政治的影響力のある人物やグループとの連携が不可欠であると考え民主党に接近、当時のニューヨーク州知事アル・スミスの補佐官として労働条件に関する資料の作成に専心した。ところが、スミスが1928年の大統領選出馬のため州知事を辞任、彼女の仕事は後任のフランクリン・ローズベルトの手にゆだねられた。幸いにも二人は仕事を通じて意気投合、やがて同志的絆が生まれる。

1933年3月フランシスが労働省の主に就任するや、まず目にしたのはこの官庁が度し難いまでに腐敗し、非生産的で人種差別主義に首までどっぷり浸かっていたことである。彼女の初仕事は、ヘーラクレスによる“アウゲイアースの牛舎の大掃除”さながらの組織・機構改革であった。その一つが労働統計局の新設であり、これにより正確な失業統計を得られるようになった。彼女はたま翌年発表した『職場の人びと (*People at work*)』のなかで、「アメリカ合衆国は労働者を保護し十分な賃金を支払うに足る豊かな国である。そうした目的を達成するために、最低価格による自滅的競争を回避すべく統一した社会的保護基準を制定することからはじめなくてはならない」と持論を披瀝している。

パーキンスが労働長官に就任した時、労働組合は瀕死の状態にあった。彼女は労組の組織率を高めるためにさまざまな試みを実施した。その努力が報われて、労働長官のポストを退く1945年の組合組織率は35%近くへと上昇した。これと並行して、パーキンスは政府が各産業セクターに対して労働条件の拘束力のあるルールを定めた団体協約を労働組合と締結することを要求した。この結果、繊維産業セクターにおいて、アメリカ建国史上はじめて児童労働が廃止された。彼女が長年取り組んできた活動がここに実現したのである。しかしより重要なことは、1935年の社会保障法の施行の基礎をなす経済安定委員会の長に就任、失業保険制度の制定にこぎつけたことである。さらに、1938年には最低賃金法の礎を築いた。フランシス・パーキンスこそは、“ニューディール (New Deal)” という社会革命の化身であり、ローズベルト政権でもっとも影響力のある閣僚と称されたのは理の当然である。

1945年転機が訪れた。盟友ローズベルト大統領が死去したことであり、パーキンスは向後の暮らし向きを考えなくてはならなくなった。夫のパウエル・ウィルソンと一人娘のスザンナがともに心の病を患い、かれらを物心両面で支える必要があったからである。彼女はいくつもの大学に出講し授業を掛け持ちした。フランシス最晩年の1961年に大統領に就任したジョン・F. ケネディが見るに見かねて自らに政策の助言をする仕事を一再ならず大先輩に提示した。だが彼女は頑として拒否し仕事をつづけた。そしてケネディ大統領がテキサス州ダラスで暗殺された2年後の1965年5月14日、85年の生涯に幕を下ろした。

1946年に出版されたパーキンスの『わたしの知るローズベルト』は、彼女がニューヨーク州で労働行政に携わっていた時分来の盟友フランクリン・デラノ・ローズベルトへのオマージュであるが、同時に“ニューディール”と称された政策体系の初の証言でもある。パーキンスの曰く、「第32代合衆国大統領の同僚やかれを知る人たちがこの世から去ったのちも、ローズベルトという人間は希望と社会正義の象徴として末永く記憶されるであろう」。まったく正しいが忘れてはならない。それはローズベルトの労働長官として12年の長きにわたって政権を支えた“同志”フランシス・パーキンスあつてのことである。

セシル・カーン (1877-1948), シュザンヌ・ラコール (1875-1975) およびイレーヌ・ジョリオ＝キュリー (1897-1956)

一方、大西洋の対岸のフランスでも、1936年春の議会選挙で社会党と共産党の反ファシズム統一戦線派が勝利しレオン・ブルム率いる人民戦線内閣が誕生した。ブルム内閣は翌年6月に総辞職に追い込まれ、その後38年には第2次ブルム内閣が成立するも最終的には社共両党が決裂することによって人民戦線はその短い歴史に幕を下ろした。この点、アメリカのフランクリン・ローズベルトの長期政権とは大きく異なる。しかし、第1次ブルム内閣でフランス憲政史上はじめて3人の女性閣僚が誕生した。いずれも高等教育を受けた当時としてはきわめて例外的な女性たちであった。すなわち、セシル・カーン、シュザンヌ・ラコールそれにイレーヌ・ジョリオ＝キュリーの3人であり、それぞれ国民教育担当副長官、児童福祉担当副長官そして科学研究副長官に任命された。

まずカーン副長官からはじめよう。彼女は1877年7月16日パリの北12キロのアンジャン＝レ＝バンの裕福なユダヤ人の家庭に生まれた。父はドイツと国境を接するフランス東部のアルザス地方の工場主であった。かれは娘の教育にはさほど熱心ではなかったが、当の娘は両親には内緒でEPS（現在の高等学校ないし師範学校）進学検定試験を受けて見事に合格した。1894年のことである。その後、セシルはフェミニスト哲学者レオン・ブランスウィックと出会い、1899年に結婚、やがて4人の子供の母親となる。

セシル・カーンの政治活動は全国婦人評議会 (CNFF) の労働事務所に籍を置いた1908年にはじまる。翌年には全国婦人参政権同盟 (UFSF) に参加、翌々年の1910年に事務局長に就任している。同時に、彼女はフェミニズム系週刊誌『フランス女性 (La Française)』の編集長を兼任している。さらに、カーンは1924年、急進黨 (Parti Radical) —— 正式名称、共和・急進・急進社会党 (PRS: Parti Républicain - Radical - Radical Socialiste) —— が女性の入党を認めたのを機に入党し、女性参政権の拡大、女子教育の促進、公衆衛生劣化の監視、学校給食の実施などの教育・保健・社会活動に専心した。

1936年の第1次ブルム内閣でセシル・カーンが国民教育担当副長官に抜擢さ

れたのは、そうした活動が評価されたからである。実際、カーンは1937年に報告書を作成し、学校給食の実施、障害児童の教育の充実を提唱しただけでなく、女性たちに教育や保健衛生の普及のための地方担当職員ポストを提供したいと考えていたという。しかし、ブルム政権がわずか1年で倒壊、かれはカーン構想を実現すべく後任のカミーユ・ショータンに彼女の副長官留任を願い出るも叶わず、彼女はブルムとともに政治の表舞台から去った。

つぎにシュザンヌ・ラコールであるが、彼女は1875年5月30日フランス中部のコレーズ県ベイザックの裕福な家庭に生まれた。12歳の時、シュザンヌの両親はカトリック修道院の運営する寄宿学校に娘を送り出し、彼女はそこで中等教育進学試験の準備をしていた。幸い彼女はこの試験にパスするも、初等教育教員を育成する師範学校進学検定試験を受験し見事合格、1891年から4年間勉学に励み教員資格を取得した。

爾来、シュザンヌ・ラコールは彼女の地元で教員生活を送るが、やがてフランス西部のドルドーニュの小学校の校長として赴任、1930年までこの地にとどまる。これと並行して、彼女は政治運動に参加、1906年にSFIO（第2国際労働者協会フランス支部、通称フランス社会党）に入党している。当時、この地方でSFIOの党員はラコールだけであったが、全国社会主義婦人委員会（CNFS）の長を努め、国内の新聞各紙に論文を寄稿していた。

もっとも、シュザンヌ・ラコールは1930年代に至るもなお全国的に知られた活動家ではなく、レオン・ブルムが彼女を児童福祉担当副長官に任命した時、周囲からは驚きをもって迎えられた。いや、だれよりもシュザンヌ自身が驚いたに違いない。だが、彼女のことをよく知っていたのは、別人にあらず、ブルムその人であった。かれはシュザンヌ・ラコールの政治家としての能力を非常に高く買って党機関紙に彼女の政策を発表させる機会を提供しただけでなく、党地方組織の責任者に抜擢するシグナルを送りつづけていたのであった。ことほどさように、児童福祉担当副長官としてのシュザンヌ・ラコールは養護施設（Assistance publique：現在のAide sociale à l'enfance）を設立し、孤児をはじめ貧困者や病人の救済を目指して1937年6月21日ブルム内閣が総辞職するその日

まで副長官の任務に専心努力したといつてよい。

レオン・ブルム内閣の「3羽のツバメ」のしんがりは、イレヌ・ジョリオ＝キュリー科学研究担当副長官である。彼女は1903年にノーベル物理学賞を、11年にはノーベル化学賞を受賞したキュリー夫妻を両親に1897年にパリで生まれた。イレヌは長じて両親と同じ道を志し、母親マリーの助手であったジャン＝フレデリック・ジョリオと1926年に結婚する。そして両親と同じく夫妻で行った原子物理学の研究が認められて1935年にノーベル化学賞を受賞した。彼女はまたフェミニストで、いわゆる“活動家 (militante)”ではなかったものの反ファシズムを信条とし、夫のジャン＝フレデリック——のちにフランス共産党に入党——とともに街頭デモに参加していた。その意味で、イレヌの科学研究担当副長官は適任といえるが、残念なことに彼女がその任にあったのはわずか数週間でしかなかった。彼女がこの年母校パリ大ソルボンヌ校教授に就任、研究に割く時間がなくなることを危惧したことが主因であった。

それでも、イレヌは副長官在任中、科学者の政治的発言力の向上、研究費の増額や国立科学研究センター (Centre national de la recherche scientifique: CNRS) の設立などに意を注ぎ精力的に行動した。その甲斐あって、1939年にCNRSが設立されやがて国内最大の基礎研究機関に成長する (イレヌの夫ジャン＝フレデリックが1944–6年同所の総裁を務めた)。

以上、フランス初の女性閣僚3名を駆け足で紹介してきたが、第1次ブルム内閣が短命であったためいずれも任期は1年そこそこ、12年間の長きにわたって連邦労働省のトップとして君臨し、社会保障制度を充実させたフランシス・パーキンスのアメリカの事例とは大きく異なる。しかしそのアメリカであつても、パーキンス長官の後任として女性たちが政治のセンターステージで活躍し正當に評価されるにはなお相当の時間を要した。

かたやフランスでは女性閣僚が新たに生まれなかっただけではない。家庭内夫婦同権、女性参政権の拡大が女性閣僚3人を戴く人民戦線内閣にあつても政治的アジェンダとはならず、ナチス＝ドイツのくびきからフランスが解放された1944年まで待たねばならなかった。SPD (ドイツ社会民主党) に所属し旧西

ドイツ宰相を1974年から8年間務めたヘルムート・シュミットが“ヨーロッパの祖母 (Großmutter Europas / Grand-mère de l'Europe)”と謳ったフランス人ジャーナリストのルーズ・ワイスが「ツバメが3羽飛来ても春は来なかった」といって時の世相を嘆いたのも理解できないではない。

ちなみに、かれら「3羽のツバメ」につづく女性閣僚は、1959年12月に誕生した第五共和制下のモーリス・ドブレ内閣の社会問題担当長官ナフィサ・シド・カラであった。ブルム内閣の成立から20余年の年月が経過していた。特記すべきは、シド・カラ長官がトルコ系アルジェリア人コミュニティ出身の女性であり、フランス国内の社会的マイノリティが政治の表舞台で活動した女性政治家第1号となったことである。

3. 経済・経営思想における女性たちの営み

経済思想史にその名を深く刻む女性はいわめてすくない。ことほどさように、例えばヴィクトリア朝のイギリスで活躍したジェーン・マーセット、ハリエット・マーティノー、ミリセント・フォーセットらのように、“エコノミスト”というよりは“フェミニスト”と見做されるか、あるいはメアリー・マーシャル、ハリエット・アン・ジェヴォンズ、エリザベート・“ブーディー”・シュンペーターらのように、いかに優秀であっても、“偉大な”夫の陰でごく控え目にその名を記憶されたにすぎない。さらにビアトリス・ポッター・ウェップにしても、英国労働党の創始者の一人として記憶されるも経済学の著述家としての知名度は決して高くない。

だが、ここで取り上げるローザ・ルクセンブルク、ジョーン・ロビンソン、メアリー・パーカー・フォレットそしてスーザン・ストレンジの4人は経済学者または経営学者として歴史に名を残す稀有な女性たちである。

ローザ・ルクセンブルク (1873-1919)

ローザ・ルクセンブルクは瞠目すべき経済理論の著述家として経済思想の歴

史に名を残した初の女性であった。従前、経済学の分野は“男の世界”であり、女性の貢献は皆無であったから、ローザの経済理論の進化への貢献は大といわなくてはならない。そのローザであるが、1871年に事実上ロシア領であったポーランドの小さな町の裕福なユダヤ人の家庭で5番目の子供として生まれた。彼女は幼年期病弱であったが、教育熱心な両親の影響で読書をよくし、やがて急進主義的著作にまで手を広げ世の中の動きに関心を持つに至った。彼女が16歳でポーランド・プロレタリア党に入党したのは意外ではなかったし、のちにSPD（ドイツ社会民主党）の黨員となった。そのローザはSPD主流派のリーダー的存在であったエドゥアルト・ベルンシュタインの改良主義的社会主義路線にはすこぶる批判的で、再三かれに論争を挑み党内で名をなした。“赤いローザ（Die rote Rosa / Rosa la rouge）”のゆえんである。

もっとも、ローザはのちに暴力革命論には与せず平和的かつ漸進的な社会改良を主張するようになる。けだし、1917年のレーニン＝トロツキーのボルシェビキ革命はこれを支持しなかった。それにもかかわらず、ロシア10月革命に触発されたドイツにおいても翌年3月にドイツ共産党（通称スパルクス団）が蜂起を企てた時、ローザは盟友カール・リープクネヒトらとともに不承不承ながらもこれに参加した。しかし、ドイツ革命は1919年1月失敗に終わり、ローザは右翼・反革命軍部によって虐殺された。時に48歳であった。

ちなみに、マルガレーテ・フォン・トロッタが監督・脚本を担当した西ドイツ映画『ローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg）』（1985年製作）をご覧になった向きも多いと思う。この映画はローザが1919年に惨殺されるまでの、女性として革命家として悩み苦しんだ半生を描いた名作であり、ローザを演じたドイツ人俳優バルバラ・スコヴァが第36回カンヌ国際映画祭女優賞とドイツ映画祭女優賞を受賞したことで話題になった。ローザの革命への情熱、その喪失と挫折を全身で表現したスコヴァの情熱的な演技と、それを彩るフォン・トロッタ監督の美しい映像が印象的であった。

さて、このへんでローザ・ルクセンブルクの経済理論研究に目を移そう。ローザもカール・マルクスに倣って社会主義への移行は資本主義の諸矛盾の帰結で

あると固く信じていたから、彼女の生涯で大きな部分を占める経済学の研究は不可欠であった。同時にまた、彼女はマルクス理論に重大な問題を見出した。すなわち、マルクスは資本主義が恐慌によって崩壊すると説く一方で、代表作『資本論 (*Das Kapital*)』の再生産表式論において、生産手段と消費財の二つの生産部門との関連を詳しく論じ、どのような諸条件のもとであれば資本主義の均衡した成長が達成されるかを証明することに意を用いている。

ローザは名著『資本蓄積論 (*Die Akkumulation des Kapitals / The Accumulation of Capital*)』において、19世紀初頭来の成長論争、マルクスの諸命題の批判的紹介とそれが引き起こした論争、これらの諸問題を解き明かすための独自の解決策を提案している。資本蓄積または「拡大された再生産」は、労働者の労働によって生産された“付加価値 (plus-value / Mehrwert)”の一部が追加資本へと転化し、この追加資本が生産の拡大を可能とする。しかし、マルクス自身はこの追加資本に対する需要がどこから生じるかを説明していない。別言すれば、かれの議論には、資本蓄積の原動力、投資の動機づけに関する説明がない。かれもまたジャン＝バティスト・セーの「販路 (*débouchés*)」説に倣って、あらゆる生産物は問題なく売れる——と暗黙の裡に想定していたのであった。

ローザ・ルクセンブルクは、トマス・マルサスのアイディア——のちにジョン・メイナード・ケインズも利用することになる——を批判的に取り入れてつぎのようにいう。すなわち、生産の増大をもたらす諸商品の販路を確固たるものとするには有効需要が必要である。この需要はもっぱら資本家と労働者の支出によって生み出されるが、資本主義の成長にとって非資本主義的環境が不可欠だという。ローザによると、一国の非資本主義的環境とは、農業者や職人のセクターのことである。ところが、経済発展の遅れた諸国における「販路」は国の「外部」——欧米先進諸国にある。ここに現代資本主義を特徴づける「帝国主義 (*Imperialismus*)」論の根源があると説くのである。

ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』の英語版の序文を寄稿したケンブリッジ大学ケインズゼミの英傑ジョン・ロビンソンは、ポーランド出身の革命家 (ローザ) の著書とゼミの指導教官 (ケインズ) の主張の間の符合ないし相

似性に着目しつつつぎのような結論を導き出している。すなわち、「〔ローザの〕著書は、現代のいかなる正統理論であろうと決して真似のできない洞察力をあますところなく指し示している」。

ジョーン・ロビンソン (1903-83)

そのジョーン・ロビンソンであるが、軍人のフレデリック・バートン・モリス卿を父に1903年に生まれた。長じてケンブリッジ大学に進学、ジョン・メイナード・ケインズを指導教官と仰いだ。彼女は私生活、研究生活そして教員生活にあって、何事にもおそれとは順応しない人間で、1933年に上梓した『不完全競争の経済学 (*The Economics of Imperfect Competition*)』こそは、そうした彼女にふさわしく、しかも既存の学説にとらわれず独占の存在を考慮しつつ新古典派経済理論を再構築するという野心に富んだ作品であった。ところがあろうことか、本書は彼女の忌み嫌う正統派経済学者たちに高く評価された。憤懣遣る方なかったろう。爾後、ロビンソンは正統派経済学と訣別し、1969年に本書の再版を上梓したさい、「序文」で従来の研究姿勢を自己批判している。

ロビンソンは学部生時代から“ケインズの秘蔵っ子”としてつとに知られていたが、批判を決して怖れない人間だということも周知の事実であった。毒気をふくんだ文章は彼女の^{おはこ}十八番であり、ジョーン・ロビンソン作『美女と野獣』は最たるものある。曰く、商家の美しい娘は醜い野獣に嫁すことになっていたが、野獣はイケメンの若者に変身し、二人ははれて結ばれる。かれは美しい猷身的な妻を娶って多くの「消費者余剰」を、かたや新妻はハンサムな夫のために家事労働を厭わず行うことによって「生産者余剰」を享受する。けだし、二人は生産者余剰と消費者余剰とのハッピーな組み合わせによってお互い理想を高く掲げ、支出対象の限界効用の均等化したがつてまた満足の極大化を達成し未永く幸せに暮らしたとさ……。

後年、ジョーン・ロビンソンはケインズのメッセージの革新的内容が、ケインズ革命の流産の結果、精彩を欠いた学説に変質したという。彼女はその理由を“ケインズ折衷派 (keynésians bâtarde)”と痛罵した正統派経済学者たちによる、

ケインズ主義と新古典派理論との「総合 (synthesis)」にもとめたが、そうした折衷理論が第2次世界大戦後の経済学会で支配的学派を形成するようになったことは、あまねく知られるところである。

1930年代末、新古典派経済理論によらない経済理論の構築を試みていたロビンソンは、ポーランド出身の経済学者ミハウ・カレツキーと出会い、かれから有益な着想を得たとされる。かれがカール・マルクスから出発してケインズ理論と同等もしくはこれを上回る理論を構築したことを知ったからである。ジョーン・ロビンソンは即座にマルクスの研究に着手した。そして1942年、イギリス経済学会ではじめてマルクス学説を肯定的に論じたアカデミックな著作『マルクス経済学 (An Essay on Marxian Economics)』を上梓した。それによると、ドイツ出身の哲学者こそは、成長、恐慌そして失業といった真の経済問題に関心を持った著述家であったと評価した。

しかし、ジョーン・ロビンソンが経済理論にもたらした最大の貢献は1950年代になってからである。ケインズの『一般理論 (General Theory)』の一般化計画が、それである。彼女に倣えば、ケインズの関心はもっぱら短期であったが、成長理論を構築するには分析のスパンを長期化する必要がある。しかも、ある程度まで独占的性質の生産装置を有する現代資本主義の諸制度やゲームのルールを考慮しなければならない。こうした思考にもとづいて、彼女は数学的表現を極力抑制したフレーズを用いつつ企業者の選択した投資比率が基本変数を構成するモデルを開発した。

国連「国際婦人年」の1975年、ジョーン・ロビンソンがスウェーデン王立銀行アルフレッド・ノーベル記念経済特別賞——いわゆるノーベル経済賞に一番近いとの評判であった。だがこの年の受賞者は、ソ連出身のレオニート・カントロヴィッチとオランダの経済学者チャリング・クープマンの二人であった。ロビンソンのいわゆる「わたしの敵ども」が画策した結果であり、しかも女性であるという事実が致命的なハンディーとなった。

ジョーン・ロビンソンは約半世紀にわたる研究生活において、24の研究書を著わし、数百の研究論文を発表したが、多くは経済学の進化にあずかること

大と評価されている。だが、それにもかかわらず母校ケンブリッジのガートン・コレッジの教授に任命されたのは、彼女が62歳になる1965年であった。彼女の連れ合いで経済学者のオースティン・ロビンソンの退官後空席となっていたポストを引き継いだのである。爾来、多くの若者が彼女のもとで学び、のちにノーベル経済賞を受賞するアマルティア・セン、ジョゼフ・スティグリッツもイギリス留学中ガートン・コレッジのジョン・ロビンソンゼミに所属し彼女から直に指導を受けた。

ちなみに、フランス人経済学者で貧困問題と開発経済学をMIT（マサチューセッツ工科大学）で講義するエステル・デュフロが2019年女性初のノーベル経済学賞を受賞した（夫のアジビット・V. バナジーらと共同受賞）。40年ほど前の1975年、ジョン・ロビンソンがノーベル経済賞に一番近いとされながら叶わなかったことを思えば隔世の感がある。デュフロが女性というにとどまらず、ロビンソンが蛇蝎の如く忌み嫌った正統派経済学者ではなかったからでもある。デュフロこそは経済学の世界に遅い春の訪れを告げる“ツバメ（hirondelle）”であるかもしれない。

メアリー・パーカー・フォレット（1868-1933）

メアリー・パーカー・フォレットは、1868年9月3日マサチューセッツ州ボストンのクエーカーの家庭に生まれた。父は大変な資産家で、メアリーが生活の糧を得るために職に就かずとも一生自活できるだけの財産を遺してくれた。お蔭をもって、彼女は地元ハーバード大学附属女子部とイギリスに留学してケンブリッジ大学で学んだ。彼女がとくに興味をもったのは政治学であり、卒業後ボストンの婦人同盟に参加したが、この女性組織はとくに婦人参政権拡大に力を入れていた。メアリーはそうした運動に関わるだけではなく、20年の長きにわたって貧しい地域の日常生活の支えとして活動した。具体的には、新しい移民たちの研修を行うコミュニティーセンターやかれらの子弟の職業訓練事務所の設立などに力があつた。

こうした活動が、やがてメアリー・パーカー・フォレットをして企業やその

経営に目を向かわせしめることになった。だから、彼女は女性労働者と労働争議に関する第三者委員会の代表を務めることによって労働組合と経営者とに接することをよしとした。彼女はまたもっとも進歩的メンバーにシンパシーを抱きつつも、企業の人事責任者やベルトコンベアを使った流れ作業工程またはライン工程で働く女性労働者などからのヒアリングを通じて工場という組織を研究した。

メアリーが1924年に上梓した自身3冊目の著書『創造的体験 (Creative Experience)』のなかでマネジメントの世界に飛び込んだ理由を書き記している。すなわち、彼女は哲学、心理学、法律を学びつつも、自らの体験や友人の哲学者・法律家・ジャーナリストたちとの意見交換が自分にとってははるかに有益であったと。クリスチャン・シャヴァニユウのいわゆる「マネジメントの女教皇 (papesse du management)」メアリー・パーカー・フォレットの誕生である。

実際、1925年このかたメアリーはマネジメントの研究に献身し、つぎの言葉信条とするに至った。曰く、「〔労働〕争議は粗暴で和解に多くの犠牲を避けられないものと考えてはならない。いつでも起こり得るプロセスなのだ」。それぞれに利害や知見を異にする経営者、労働者、管理職が労働争議を日常的かつ健全な行為と見做し、多様性や異同を互いに認め合うという思想は1925年当時としては革命的であった。ことほどさように、1960年代に至るまで数多くの経営学者たちが企業を機能不全に陥らせる労働争議の回避を可能とする「科学的組織 (organisation scientifique)」を追い求めていたことを思えば、われらが「マネジメントの女教皇」はかれらのはるか先を闊歩していたのである。

最後にいまひとつ、メアリー・パーカー・フォレットの提唱した革命的アイデアを紹介しておこう。グループ作業または共同作業 (travail collectif) が、それである。アメリカ経営学の源流と称されるフレデリック・ウィンスロー・テイラーは1911年にこういていた。すなわち、「人間がチームで作業をすれば、個々人の作業効率はずいぶん悪いチームのそれと同等か、もしくはそれ以下だ」。

メアリーはこれに真っ向から異を唱えグループ作業のメリットを最大限引き

出すことを可能とする作業方法を提唱した。彼女はのためのツールとして経営学における“リーダーシップ (leadership)”というすぐれて現代的な概念を生み出していた。すなわち、「リーダーとはグループが全体として作業ができるように組織し、かつグループの持つあらゆる潜在力をそこから引き出すことのできる人間である」。

その意味からすれば、メアリー・パーカー・フォレットのリーダーシップ論は、近代経営管理論の礎を築いたと謳われるアンリ・ファイヨールやフレデリック・ウインスロー・テイラーの考案したハイアラキーの頂点という概念とは決定的に異なる。「マネージメントの女教皇」の教義の最大のポイントは、個としての人間に対する深い敬意にもとづいているといつてよいのである。

スーザン・ストレンジ (1923-98)

以上の3人とは異なり、スーザン・ストレンジのキャリアは英週刊誌『エコノミスト (The Economist)』から出発し、のちに週刊新聞『オブザーバー (The Observer)』に移籍して最年少でアメリカのホワイト・ハウス特派員として勤務、さらにニューヨークの国連本部を担当するようになった。彼女が第2のキャリアとしてイギリスのチャタムハウス——王立国際問題研究所 (RIIA) の研究員のポストを得たのは、42歳の時であった。のちに彼女が国際政治経済学者として認められたのはRIIAでの仕事っぷりが評価された証左である。

スーザン・ストレンジは1923年6月9日イングランド南西部のドーセットに生まれ、長じて上京し第2次世界大戦の最中LSE (ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス) で経済学を学んだ。彼女が本領を発揮するのはRIIA時代であるが、以下が当時の関心事であった。すなわち、グローバル化で支配力を有するのはだれか、だれがゲームのルールを書くのか、ルールメーカー以外の他の経済主体はこれに全面的に従わなくてはならなくなるのか、さらにApple、中国、(多国籍)企業・金融機関はどのように対応するのか——ということである。スーザンによれば、解答すべきはつぎの4つであり、そのためには経済学、政治学それに歴史の長期トレンドに当たることが肝要である。そして4つ問いに

解答できれば、世界を総合的に理解する鍵を手にすることができるというのである。

4つの問いの第1は安全保障の構造であり、そのすべてが人間社会に重くのしかかり圧迫する脅威から避難し得るような保護システムを提供する諸条件を規定する。その脅威とは、具体的には武力衝突やテロリズムのほか、食料問題や環境問題などであり、それらの処理・解決が難渋することである。その第2は生産構造である。つまり、生産を決定する一連の合意や協定——いかなる企業が、いかなる顧客のために、いかなる国や地域で、いかなる方法を用いて、いかなる諸条件のもとで生産要素を結合（生産・再生産）するのか等々の協約や取決めを見直し書き改めることであるといつてよい。

第3は国際金融構造であるが、これこそがスーザン・ストレンジのもっとも重視する分野である。実際、彼女は1960年代から70年代にかけて国際金融の研究に専心努力し書籍を2冊著わした。『カジノ資本主義 (Casino Capitalism)』と『マッド・マネー——世紀末のカジノ資本主義 (Mad Money)』である。その彼女は1986年来「資本主義的金融システムは急速に拡大するカジノになろうとしている」と警告していた。しかも「カジノはきわめて不安定的である」という^{リスク}危険の存在を忘れない。

そして4つ目は知の構造である。これは抽象的にはさまざまな思想の世界、それぞれがあたえられた一時点で自分たちの世界の代表を生み出す信頼のシステム、自らがそこで展開するさまざまな制約や機会に対応している。より現実的レベルでは、情報の発見、蓄積、保存、交信を可能とする諸条件をいう。スーザン・ストレンジはGoogleやFacebookの話をしていないものの（個人）情報の管理・監督の重要性を心にとめて考えなくてはならないと警告している。

これらの諸構造の分析によって得られた結果は、まずアメリカが世界一の大国であること、この国が指導権を失ったとは考えない。しかし、アメリカをふくむすべての先進国は、民間経済主体への制御の力を喪失した。後者は多国籍企業や銀行のみならずマフィアやNGO（非政府組織）のかたちで再編の渦中にある。最後に、グローバル経済は制御の効かない経済圏を拡大させるであろう

が、そこでは国家的主体と非国家的主体とが向かい合って一連の事象を協議し、合意や取決めに至ることがますます困難になりつつある。スーザン・ストレンジにとって、グローバル・ファイナンスとはそうした制御の効かない経済領域のことなのである。

スーザン・ストレンジを知る人たちによれば、彼女はカリスマ性のある人物であり、彼女の人付き合い——人間のかつ知的な付き合いに共感する研究者を数多く輩出し、その数は今日に至るも減ることはない。彼女は生前そのような人間たちを“目に見えない同志 (collège invisible)” とか“気のおけない仲間 (kindred spirits)”と呼んでいたといわれるが、言い得て妙である。

4. 企業の再生——ビジネスに情熱を燃やす女性たち

経済の歴史をつぶさにみていくと、女性の経営者や事業家と出会うことがすくなくない。かれらがたとえ法律上夫に依存しているとしても、その多くは経営の自立性を手にし、時に大変有能な経営者たることを妨げるものではなかった。だから、女性経営者たちを男性のライバルが嫉妬したとしてもすこしも意外ではなかった。

オリヴ・ド・レストナック (1572-1652)

現在入手可能な歴史的資料がつまびらかにする最古参の女性事業家は、フランス西部の都市ボルドー生まれのオリヴ・ド・レストナックであるが、どのような事業家であったのであろうか？ 答えようにも彼女は長いこと無名で、ごくわずかの人間たちだけが地元の修道士会の保護者にして事業経営を指導した慈善事業家であったことを知るにすぎない。

オリヴ・ド・レストナックは1572年ボルドーの裕福な家庭に生まれたというものの、1592年に結婚する以前の消息は杳として不明である。彼女は生涯三度結婚し三度寡婦になった。子供はいない。しかし、彼女は大変な資産家であった。そのオリヴが最初に手にした財産は、兄ピエールが父アルノーから相続

した地味豊かなぶどう園であった。兄が1607年に急死したため妹がこれを引き継いだのである。けれども、オリーヴがやがてこの地方最大のドメーンの一つとなる“シャトー・マルゴー”の礎を築くのは、1610年にラモト・マルゴーを購入した時である。彼女はぶどう栽培とワイン醸造のすべての段階の作業を熟知していた。だから、彼女は大樽を購入し、収穫したぶどうの販売交渉を行い、農地経営契約を増加させた。

オリーヴ・ド・レストナックの活動はそれだけではなかった。歴史家のカロリーヌ・ルマオは彼女の伝記のなかで「オリーヴ・ド・レストナックは大変な金持ちだった」という。事実、古文書によると、彼女は農民向け少額融資からボルドー市やアキテーヌ地方の有力者へ的高額融資に至るまで手広く貸金業を営み、融資件数は200件近くに上った。オリーヴは上流階級のための銀行家とってよいが、彼女の最初の夫がボルドー市^{バルルマン}高等法院の最高法院長であったことも手伝って司法官や行政官などの知人が多かったことを思えば当然である。

このほか、オリーヴは親戚縁者にも資金を融通していた。だが、営利に竿さすでも情に流されるでもなかった。「ビジネスはビジネス (Les affaires sont les affaires)」が彼女のモットーであった。さらに、彼女は当時の恵まれた人間たちがしたように、国王が売り出した権利や職業(裁判所書記官、徴税請負人など)を買ったり、市が発行する公債を購入したりして財をなしていた。だからといって、それは利殖のためばかりとはいえなかった。

オリーヴ・ド・レストナックは1652年12月22日生まれ育ったボルドーで亡くなった(享年79歳)。葬儀の折、彼女の遺体を安置したボートが市内を流れるガロンヌ川を下りシャルトロン河岸に着いた時、居並ぶ聖職者という聖職者はオリーヴ生前の善行に謝意を表すべく直立不動の姿勢で見送ったという。

それもそのはず、オリーヴは晩年の1650年、聖ヴァンサン・ド・ポールの設立したラザリスト修道士会にラ・ミッションのドメーン(シャトー)を遺贈することを決し、国王ルイ14世もこれを認めた修道士会に対して王令を発した。これを受けて、1664年にオリーヴの相続人カトリーヌ・ミュレが同修道士会にシャトーを無償で贈った。オリーヴのシャトーはその後修道士会の手で拡大さ

れ、今日シャトー＝ラ＝ミッション＝オーブリエオン (Château la Mission Haut Brion)
アペラシオン
の名称で知られる。

マルグリット・ブレーキー (1729-?)

さて、ここで時計の針を半世紀ほど先に進めよう。すると、華やかさには欠けるものの堅実な事業家の姿が見えてくる。マルグリット・エリザベート・オメルルである。彼女は1727年3月16日パリに生まれ、19歳の時に両親の反対を押し切って16歳年上のギヨーム (ウィリアム)・ブレーキーなる人物と結婚する。夫はイギリス出身であったが、マルグリットと同じパリ市6区の同じ通りにある袋小路に住み、自らは商人にして革新者を名乗っていた。

夫にとって妻の実家との付き合いは商業的なメリットがあった。彼女の実家は富裕層を顧客とするかつらの製造を^{なりわい}生業とし、職業上のネットワークは大変魅力があった。マルグリットの父親はある時から婿殿を仕事上の代理人として家業の管理を任せるも、当人は新製品の開発に注力した。例えば、伸縮性のある縞帯がそうであり、陸軍や海軍の医療施設への売り込みに余念がなかった。

ギヨームはすこぶる多才な御仁と見え、掛け時計の精密部品のスペシャリストでもあった。しかし、実際に時計の振り子や腕時計の発条を製作する30人余の職人を雇用する家族経営のアトリエを切り盛りしていたのはマルグリットであり、夫が王立エソンヌ製造所の所長に任命されアトリエを閉鎖するまでの11年間、彼女は来る日も来る日も職人たちの世話に追われていた。

そんなマルグリットと夫の間に綻びが生じる事件が1762年に起きた。記録によると、夫のギヨームは多くの愛人を持って家に寄り付かなくなったうえ、借金で首が廻らなくなっていた。マルグリットは夫の借金を返済する見返りに、夫には夫婦財産分割を承諾させた。それからというもの、商才のあるマルグリットは自らが商家として立ちいくように思案していたが、思い切って大衆の嗜好を採り入れることにした。時あたかも七年戦争 (1756-63) がフランスの敗戦で終わり、戦時中の儉約生活に飽き飽きしていた庶民相手に、1767年に英国製の金物や雑貨などを商う店を立ち上げるが、舶来品店らしく “Magasin Anglais (英国

屋)”を屋号とした。マルグリットの読みは的中、商売は繁盛に繁盛を重ねた。

その数年後、夫婦間またしても事件が起きた。英国ブームが去り、マルグリットの商店が破綻しかけ、商品の一部が税務当局に差し押さえられた。結局、1771年4月に店は潰れ、在庫品を売却するはめになった。夫のギヨームはこの時を待っていた。かれは債権者を連れ立って、これは「取り込み詐欺 (confidence trick)」であってマルグリットは立派な犯罪者だと主張したのである。このため彼女は同年5月5日小シャトレ (牢獄) に収監された。

しかし訴えの記録によると、彼女は仕事熱心な女性であるとの抗弁が認められ、かつ借金を遅滞なく返済することを約して1772年1月16日釈放された。それと同時に、彼女は事実上の離婚 (séparation de corps et d'habitation) を勝ち取って夫と別居し互いに夫婦として負う責任から解放された。ギヨームが料理女との間にできた3人の隠し子を養っていたのだから、当然といえば当然の成り行きであった。

これら一連の出来事に思いを致せば、いかなマルグリット・ブレーキーといえどもビジネスへの熱意を喪失したとしても不思議ではないと思われがちだが、どっこいそうではなかった。彼女は捲土重来を期して、一時とはいえ収監された小シャトレのセヌ川対岸のメグスリー河岸に新しい輸入雑貨の店をオープンした。元夫がイギリス人であることを思えば、英国製品を商う商店に抵抗を覚える向きもあろう。だが、マルグリットはあくまでもビジネスを最優先した。彼女の成功にあやかって同種の商店がいくつも誕生するも、マルグリットの“Magasin Anglais”が老舗中の老舗である。

マルグリット・ブレーキーの商才は鋭いマーケティング感覚にあった。七年戦争時の儉約政策にうんざりしていたのは庶民ばかりではなかった。大貴族や地主や商人たちもそうであり、とくに一時期財務総監 (フランスの行政府の長、現在の総理大臣に相当) を務めたエティエンヌ・ド・シルエットが提唱した極端な儉約政策の一つ——貴族の子弟たちのお見合のさい著名な画家に描かせた肖像画を送っていたのに代わって、横顔などの輪郭を描いて中を黒く塗りつぶした切り絵を奨励した——はいちじるしい不興を招き、のちに切り絵を“シル

エット (silhouette)”と呼んで鬱憤ばらししたという。

マルグリットが輸入した英国製品のセールの成功は、儉約に飽き飽きした人びとの消費選好を読んだマーケティングの勝利の賜物であった。かなでも、一般市民だけでなく貴族層を顧客に取り込んだ英国商店はマルグリットに高収入を保証した。ところが、1777年、“Magasin Anglais”の店主は忽然と姿を消し、それっきり行方知れずになった。訴えられたわけでもないし、店が立ち行かなくなったわけでもない。レポーターのクリスチャン・シャヴァニユウならずとも、われらが“Magasin Anglais”の女主人に、“Good luck, Marguerite!”とエールを送りたくなる。

マダム・ド・マレーズ (1737-1822)

フランス初のプリント布地である“ジュイ・プリントのテキスタイル (Toile de Jouy)”はわが国でも大変人気があるが、この布地がドイツで生まれフランスに帰化した実業家クリストフ＝フィリップ・オベルカンブがその経営に携わった王立綿布製造所で製造されたことは意外と知られていない。パリ市中には、かれの名を冠した通りや駅があるのに、である。

そのオベルカンブが事業をはじめたころ、サラザン・ド・マレーズという出資者がいた。かれは裕福な年金生活者で、ある事情で中年過ぎまで結婚せず、47歳の時ルーアンの王立工場で布地の仕入れを担当していたマリー・カトリース・ルネ・ダルセルという名の女性を娶った。彼女こそちにジュイ＝アン＝ジョザスの王立プリント布地製造所の経営を成功へと導いた経営財務部門の長 (DAF) マダム・ド・マレーズである。

マリー・カトリースは1737年に裕福な商家に生まれ、幼少の折から利発で音楽、乗馬のたしなみはもとより、簿記の作成、数学、英語やドイツ語などの外国語にも長けていた。その彼女を一躍有名人にしたのは、自身が経営に携わった企業の急場を救った事件であった。のちにド・マレーズが、テュルゴー内閣 (1774-76) の閣僚を務めたヘルヴェティアはジュネーヴ出身の銀行家ジャック・ネッケルに事情説明を要請された時、実際にこれに応じたのはマリー・カトリース

ヌであった。

歴史家のセルジュ・シャサーニュが彼女を「責任感の強い女性 (femme de devoir)」と称したのもゆえなしとしない。けれども、マリー・カトリーヌは何よりも母親としての務めを立派にはたした。彼女は当時としては晩婚ながら8人の子宝(うち2人は新生児死)に恵まれ、製造所の激務をこなしながらも子供たちの顔を半月以上見ないことはなかったという。

マリー・カトリーヌがまれに見る女丈夫といえはそれまでだが、それでも一つだけ懸念材料を抱えていた。製造所のトップであるオベルカンブがその気になればいつでも夫を厄介払いできたことである。そこで彼女は一計を案じ、オベルカンブに彼女の子供たちの一人の名付け親 (godfather) になることを提案、オベルカンブもこれに同意して両家の絆は強くなった。

マダム・ド・マレーズの生涯を語るなら、一にも二にも会社である。彼女は製造所にとって不利な法律が制定されると聞けば、現代の“ロビースト”と見紛う政治的eworkによって、一再ならず外部からの力が極力及ばないように取り計らった。それだけではない。1785、86年の法制が製造所の経営を厳しく制約すると見るや、当局に嘆願書を送って見直しを請うた。曰く、「自由は躍進のバネ、経済、才能や技量・技術の媒体であることに疑問の余地はありません。〔中略〕ジュイの製造所の成功は、掛け替えのない自由を活用した成果です」。

マリー・カトリーヌの努力にもかかわらず、クリストフ＝フィリップ・オベルカンブはサラザン・ド・マレーズと手を切ることにした。もっとも、二人の男性はその後とも友好関係にあり、1789年にオベルカンブが会社を去る時、マリー・カトリーヌはかれの会社持ち分を買い取った。ド・マレーズ夫妻ははれて製造所の長として会社を切り盛りすることになった。ところが直後にフランス革命が勃発し、教会の財産や一部の貴族の資産が没収され、さらに1791年にはド・マレーズ夫妻の王立製造所のような「国有財産」も押収、売却されるに至った。このため、マリー・カトリーヌが手塩に掛けて育てた製造所への献身は水の泡となった。

これを機に、夫のサラザンは引退、地方に移住して土地を購入、当地で「耕

作地主」としての名声を得て 1794 年この世を去り、二人の子供たちは亡父の遺産から上がる地代で生活したという。一方、マリー・カトリーヌはパリにとどまるもその後の消息は 1822 年に 85 歳で亡くなったことをのぞくと知られていることはごくわずかである。その一つが、「マリー・カトリーヌは大変な著名人だった」ということである。

アメリ・ド・ディートリック (1776-1855)

「わたしは国家と結婚した」とは、生涯独身を通したイングランド女王エリザベス一世の言葉であるが、アルザスの名門ベルクハイム家出身のアメリ (1776-1855) は、1797 年に添いとげたフィリップ・フリードリッヒ・ド・ディートリック (通称“フリッツ”) という夫君がありながら、「わたしは会社と結婚した」といってはばからなかった。

ド・ディートリック (フォン・ディートリッヒ) 家は 17 世紀末から製鉄業で栄えたアルザス地方の名家であったが 1789 年の革命とその後の戦争によって会社は急速に衰えた。しかも、会社の長であったフリッツの父 (ジャン) が反革命の烙印を捺されて処刑されたため会社の命運は風前の灯であった。フリッツは窮地を脱すべく軍籍を離脱して不動産や家屋 (城をふくむ) の売却、アルザス地方の知人たち——一説では当地の“フリーメイソン (Franc-Maçon)” のメンバーたち——からの資金調達などで東奔西走の毎日だった。だが、その甲斐もあらばこそ、フリッツは過労の末 1806 年 2 月 33 歳の若さでこの世を去った。

一方アメリ・ド・ディートリックは、フリッツ存命中から製鉄所の運営を委ねられていた。それゆえ、アメリは夫の死から半年後に会社の経営委員会から最高経営責任者 (Présidente-Directrice Générale: PDG) に正式に任命された。彼女の会社救済計画はここからはじまる。まず、1815 年に亡夫との付き合いのあった出資者、それに彼女が出資を懇願した人間たちに返済ができるまでに経営の改善と安定を図った。この結果、会社は 1827 年にド・ディートリック未亡人と息子の経営する家族経営の形態をとりもどし、Compagnie Familiale Veuve Dietrich et Fils と名乗るに至った。

それからというもの、アメリカは第1に製造品の再配向、なかでも高付加価値製品の増産を目指した。紡織機、鉄道車輛やレールなど新しい時代の経済に不可欠の製品の生産である。つぎに新技術の導入による生産性の向上を目指すとともに、発明の才のある高レベルのエンジニアの採用にも余念がなかった。お蔭をもって、1843年から20年ほどの間にディートリック社は5つの特許を申請しいずれも受理された。アメリカはまた管理会計 (comptabilité analytique) や経営管理 (contrôle de gestion) の開発にも注力した。そして3つ目にアメリカはアルバールとユジェヌの二人の息子に後継者教育を施し、母亡き後の会社のありようを決した。

ディートリック社は、アメリカと二人の息子と娘婿の4人がトップマネジメントを形成していたが、男性優位が当たり前の時代にあつて、アメリカが経営のトップで、資本金の過半を有する筆頭株主というのはまれなことであつた。しかも、彼女の最高経営責任者としての報酬は、3人の男性——二人の息子と婿殿——の合計額の2倍に上ったといわれ、金額はアメリカが1855年に天寿を全うするまで変わらなかった。会社はアメリカの経営手腕が功を奏して、フランスとドイツ間の3度の戦争——普仏戦争と兩次世界大戦——にも耐え、いまま門前成市のたとえが似合う賑わいを呈している。

5. 銀行業・金融業——全米初の女性銀行家は黒人コミュニティー出身

マギー・リーナ・ドレイパー・ミッチェル・ウォーカー (1864-1934)

1901年8月、マギー・リーナ・ドレイパー・ミッチェル・ウォーカーがヴァージニア州リッチモンドの聖ルーク互助会 (IOSL) の組合員を前にして銀行設立提案の趣意書を読みあげた時、彼女がアメリカ初の黒人女性銀行設立者としてその名を後世の歴史に刻むことになるとは知る由もなかった。実際、当時の銀行界で女性が成功すると考える人間は一人もいなかった。それがよしんば黒人女性となれば、笑い話の種にもならなかった。

マギーは黒人奴隷の末裔であつた。彼女の母エリザベス・ドレイパーは14歳

で身ごもり単身で出産、4年後の1868年にウィリアム・ミッチェルと結婚する。数年後、夫が原因不明の死をとげ、エリザベスは生活の糧を得るべく裕福な白人たちを顧客とする洗濯女として働き、娘のマギーは預かった衣服類を依頼主宅に届けて母を助けた。マギーは当時をふり返ってこう言う。「わたしは銀のスプーンを口にくわえて生まれてはこなかった。頭のうえに洗濯籠をのせて生まれてきたのよ」。

少女時代のマギーは勉強熱心で、長じて小学校の教員になった。数年後に彼女よりも4歳年上のレンガ工アームステッド・ウォーカー・ジュニアと結婚し一児をもうける。この時、夫は妻が教員をやめるよう諭した。ヴァージニア州の規則では、学校長が出産した女性教員を解雇する権限をもっており、遠からず妻に白羽の矢を立てると予想されたからである。マギーは教員を辞めてのち、自らも組合員であった黒人コミュニティの協同組合組織（IOSL）の仕事にこれまで以上に打ち込むようになった。ことほどさように、彼女の仕事っぷりが認められ、1899年には組合長に昇進した。

マギーが組合長に就任した当時の聖ルーク互助会はカモの浮き寝のように不安定で、組合員は減りつづけ、財政的にも厳しい状況にあった。しかし、彼女には状況を改善するためのアイデアがいくつもあった。その一つが銀行の設立であった。彼女が組合活動に参加するようになって気づいたことは、白人銀行家は有色人種一般、とりわけ黒人女性を蛇蝎磨羯だかつまかつの類よりしく忌み嫌っていたことである。だから、彼女たちがあるいは起業のために、あるいは生活のために銀行から融資を受ける機会は皆無といってよかった。

マギーは自らの構想する金融機関の設立に必要な行政上の手続きのために走り回り、会社の経営や簿記会計の講義を何週間もの間リッチモンド・ナショナル商業銀行で受けた。ちなみに、同行の経営者は白人でありながら黒人に手を差し伸べてくれた。こうして1903年7月にマギーははれて銀行設立認可を手にし、同年11月に開業にこぎつけた。記録では、初日の来行者は約300人、預入金額は100ドルと31セントであった。銀行の長であるマダム・マギー・リーナ・ウォーカーのメッセージは多くの人たちに行き届いていたといっ

口座を開設した顧客の過半が黒人女性たちだったからである。

マダム・ウォーカーは20世紀初頭のアメリカ銀行界に向かって、黒人が銀行を経営することが可能であると同時に、大切な顧客にもなり得るということを見せつけた。彼女はまたマネージメントのほかに、監査委員会の長として日常的な銀行業務を管理・監督し、貸付審査委員会の長として顧客向け融資の裁可の責任を引き受けたりもした。さらに、国内で開設された支店で多くの女性たちが勤務しているが、一つだけ例外のあることを承知していた。つまり、公衆の面前で顧客と向き合う小規模店がなかったことである。聖ルーク互助会の銀行がそうした店舗を手掛けたことは、この業界にとっての革命であった。

マダム・ウォーカーは労働者階級の黒人女性たちの生活を支援するべく少額融資を手掛け、結果としてかれらを高利貸しの餌食となることから救った。それに、モーゲージ・ローンや起業者向けの融資や小規模企業の資金調達にも注力したといわれるが、彼女の銀行は一体どのようにしてローンを組んでいたのであろうか。

たしかに聖ルーク互助会の銀行が相対的に低所得の黒人——とくに黒人女性が顧客である以上、融資対象の選別に窮したのではないかという疑問を禁じ得ない。結論は、基本的には他のいかなる銀行におけると同様に、個人の収入を基準にするが、マダム・ウォーカーの銀行の場合はそれだけではなかった。銀行の融資部は、資金需要者たちの社会的ネットワークに関する情報を蒐集していた。例えば、顧客の人としての誠実さ、世間の評判、それに仕事への取り組みやその人の持つ職業倫理などを基準にするというのである。それゆえ、仮に顧客の元利金の返済が滞る事態が出来ても、銀行はただちに当該顧客を司直や裁判所に告発するのではなく、社会的かつ道義的な圧力に訴えて問題を処理・解決した。問題顧客にとどまらず黒人コミュニティ全体へのダメージを懸念したからでもある。

マダム・ウォーカーは成功者であった。しかし、当然にも白人銀行家は彼女の銀行を歓迎しなかった。かれらはヴァージニア州当局に対して黒人銀行の規制を強化するよう働きかけ、経営監査を行うことを強いたのである。ところが、

それは白人銀行家には藪をつつく仕儀に等しかった。すなわち、州銀行規制当局は州内の半数の銀行の業務監査を実施したが、問題を指摘されたのは白人銀行家の経営する銀行のほうであって、聖ルーク互助会の銀行をはじめ州内の貧しい黒人のための銀行 14 行はすべて健全性を認められたのである。

この結果、州内の複数の銀行は閉鎖を余儀なくされるもマダム・ウォーカーの銀行はその限りではなかった。経営の健全性は 1930 年代の経済・金融危機のさい証明された。1929 年と 1931 年の間、マダム・ウォーカーは他の黒人系銀行 2 行とともに聖ルーク・ペニー貯蓄貸付組合を買収して経営基盤を強化し、自らは経営トップにとどまって危機と闘った。ところがそれは本人が考える以上の激務であり、持病の糖尿病の進行とともに、彼女の健康を蝕む元凶となった。加えて、彼女から夫と息子を奪った交通事故（1910 年）の心痛が癒えることはなかった。

マダム・ウォーカーはそれでも奮闘したが、1934 年 12 月 15 日に息を引き取った。時に 70 歳であった。「セント硬貨をドル紙幣に代える、預金や融資というかたちで」という 30 余年前の銀行設立の夢は実現した。それとともに何百人も黒人女性が自尊心を回復して人種や性差別の支配する社会で自分たちの居場所を見出す手伝いすることに半生を捧げたマダム・ウォーカーことマギー・リーナ・ドレイパー・ミッチェル・ウォーカーは初の黒人女性銀行家としてアメリカ社会で永遠に記憶されるであろう。

ヘティー・グリーン (1834-1916)

アメリカ文学を代表する『白鯨 (*Moby Dick; or, The Whale*)』は、作者ハーマン・メルヴィルの商業捕鯨に従事した体験をもとに創作された作品である。その作者には一人娘のヘンリエッタ（愛称“ヘティー”）がいたが久しくほったらかし、結局、彼女は祖母と伯母の手で育てられた。

ヘティーことヘンリエッタ・メルヴィルは 1834 年 11 月 21 日マサチューセッツ州ニューベッドフォードの捕鯨業で財をなした裕福なクエーカー教徒の家庭に生まれた。彼女は禁欲的な教育を受けるも証券取引所や祖父の商業取引に関心

を抱き、祖父亡きあとは自分を捨てた父親と和解し家業見習をするようになる。それは金銭への愛着心のなせる業であり、ヘティーの目に映るお金は個人の成功の至高の価値であった。

やがてヘティーも社交界デビューの年頃になり、父親のハーマンが娘にニューヨークの舞踏会のための支度金として1200ドルを渡した。ところが、彼女は200ドルでドレスを買ったものの、残余は金融株に投資して父親があたえた以上の金を手にした。人はこれをヘティーの異常なまでの金銭への執着を説明するエピソードと考えたがるようである。実際、彼女は自分に金儲けの才と金銭への愛着があることを父に認めてほしかったのかもしれない。

1860年の母親の死は、そんなヘティーを悲しみのどん底に突き落とした。母は生涯夫の言いなりで一時といえども愛されたためしなかった。それに、母の遺産の全部を相続したのが父であったこともある。このためヘティーは父ハーマン・メルヴィルを相手取って訴訟を起こし、伯母の遺産を手にするともに、母親のそれを父に放棄させるに至った。

この間、ヘティーはエド・グリーンなる、ガタイのいい(身長180センチ、体重100キロ)、しかも100万ドルの資産を持つ男性と知り合い1867年に結婚した。ここに、ともにイギリス出身の、銀行家の夫と相場師(または投機家)の妻のカップルが誕生した。時にヘティー33歳、当時としては晩婚であった。彼女は両親から譲り受けた遺産をもと内戦(南北戦争)時代に発行された連邦政府証券(アメリカ国債)や鉄道株に投資し莫大な資産を築いた。それはまた相場師ヘティーのデビューといってよいが、彼女の投資戦略はつぎの3点に集約される。すなわち、一つは金融株、土地・建物をできるだけ安値で買うこと、とくに土地所有者が窮している時が買い時である。つぎに、儲かりそうな物件があれば、裁判に訴えてでも手に入れること、そして、投資には情けは無用——の3つである。

一方、夫のエドは、投資家としては不適格で、ヘティーへの助言がことごとく裏目に出たばかりか、妻に無断で遺産を運用して失敗した。これを知った彼女は、怒り心頭に発すとはかくあらんとばかりにいきどおり、かれを家から放

り出してしまった。

ともあれ、ヘティー・グリーンはアメリカ合衆国一の大金持ちになったが、どう見てもそうは見えなかった——。着古したドレスと古いコートに身を包み、移動のさいは公共交通機関をいつも利用し、なおかつ彼女は税務当局による住民税の徴収を回避するために頻繁に住居を変えていた。このことから、「ヘティーけちん坊」説がまことしやかに語られるが、つぎの言葉を座右の銘にしていたと知れぼうべなるかなである。曰く、「あなたの懐中の銅貨（セント）を大切になさい。そうすれば、金銀（ドル）がそれを気に掛けるようになるでしょう」。

あるジャーナリストが大金持ちで極端な節約家のヘティー・グリーンに「グリーンさん、なぜあなたは犬がそんなに好きなのでしょうかと訊いたことがあった。答えは至極簡単。「犬は私を金持ちだと知らないからよ」。このジャーナリストの所属する新聞が「ウォール街の魔女 (sorcer of Wall Street)」の名付け親といわれる。しかし、彼女を知る人たちは「吝嗇家」, 「全米一のけちん坊」といった伝説を否定し、じつは大変な慈善事業家であったと証言している。第一、ヘティーは追いだした夫のエドの面倒を最後まで見た。ただ彼女は女性の参政権拡大には露ほどの関心も示さなかった。彼女はことあるたびに人生をこんなふうに講釈していたという。われらがヘティーの曰く、「男がやったことは、どんな女性であろうとやってやれないことはない」。

マルト・マリー・アノー (1886-1935)

フランシス・ジロー監督、ロミー・シュナイダー主演の映画 *La banquière* (邦題『華麗なる女銀行家』, 1980 年公開) をご覧になった向きもあろうかと思う。マルト・マリー・アノーをモデルとした映画であるが、この女性なかなかの^{つわもの}“強者”で、オーストリア出身の名優はその強者ぶりをほれほれするほど見事に演じていた。

すなわち、映画のヒロイン“エンマ・エケール”は慎ましい商家の娘に生まれるも独立心旺盛な女性に成長する。人前で紫煙をくゆらし、車を乗り回し、コ

ルセットを拒絶し、他の女性たちとは違うセンスを隠そうともしない。だからエンマは22歳になった時に結婚するも2年後に離婚、しかし元夫とはビジネスパートナーとして付き合いを続けた……。

“エンマ”ならぬマルト・マリ－・アノーはとにかく金に飢えていた。1920年代の投機ムードが支配する証券市場において小商いでささやかな利益を出したものの、これでは埒が明かないとみて、企業に自社株の相場操縦によって利益を上げる提案をすることを自身のキャリアと見付けた。今風にいえば、口コミを活用したマーケティング——いわゆるバズマーケティング (buzz marketing) ——による株価の吊り上げである。マルトは取引所取引が終わった時間帯の取引——いわゆる場外取引 (négociation hors-cote) で、金融株を対象にこの種の取引を行っていた。一方、ヴィヴィエヌ通りのブロンニヤール宮 (パリ証券取引所) での立合の場合、当時は女性の立入りが禁止されていたので、男装して人目を欺いたといわれる。

さらに1925年3月、マルトは投資顧問とフランス通貨の為替レート安定化政策の支援を目的とした *Gazette du Franc* となる週刊新聞 (hebdomadaire) を発刊した。同紙はのちに *Gazette du Franc et des Nations* と改名、ヨーロッパ諸国民の平和という目標を付け加えた。マルトの新聞の購読者数は増加したが、それはとりも直さず購読者が自らの預金の一部をマルトの目論見に賭けることを意味した。彼女の目指したのは政治と金融の接点であり、そのための情報蒐集に専心し、必要とあれば情報提供者への賄賂も辞さなかった。いうところのインサイダー情報 (information d'initié) の入手である。

マルトの思惑は当たった。例えば、『ガゼット』紙上で読者にマルトの推す株の「買い」を提案すれば、株価は上昇するといった具合に。もちろん、彼女のブラベートの友人たちは、新聞が出る以前に情報を入手しているから一般大衆 (読者) の儲けよりもはるかに大くなる仕組みであった。

だが、マルトの推奨した金融株は彼女の作り出した架空の会社情報にもとづいて取引されることがすくなくなかった。ある時それが一部漏れて、1928年12月マルトは逮捕された。彼女は即時釈放と高をくくったが、訴追手続きはただ

ちになされず拘留が長引いた。これに抗議したマルトは1929年3月ハンガーストライキを敢行、ために体調をいちじるしく害してパリ市14区のフォーブール・サン＝ジャック通り沿いのコシャン病院に搬送された。お蔭をもって体調を恢復したマルトは病院から脱走を試みるも失敗、刑務所に再収監される。

それでもよくしたもので、マルトは1929年3月29日仮釈放を許され、ただちに新聞の再発刊に着手した。それから1年半後の1930年10月に開廷、マルトに懲役2年の実刑判決が下された。彼女はこれを受け容れず即日控訴した。同時に、講演会を開催して訴訟費等に充てる計画を立てた。マルトの反撃が功を奏すると思われた矢先、状況は暗転した。交通事故でマルトは両足を骨折、しかも後遺症を避けられないと診断されたのである。

泣きっ面にハチとはことことであろう。1934年7月の控訴審ではマルト・マリー・アノーの主張は認められず1年半超の懲役が決した。明けて1935年2月、マルトの申告は却下されたものの、事故の後遺症に悩む彼女に免じて、裁判所はフレスネの病院に入院するよう命じ6月30日までの約4カ月間ここにとどまった。

その後、パリ市内の高級ホテルに投宿、夕べにはカジノで乱痴気騒ぎ！もちろん、無理を承知のうえでの御^{ごらんぎょう}濫行である。それから約半月後の革命記念日(1935年7月14日)当夜、マルト・マリー・アノーはホテルの一室で瀕死の状態にあった。大量のヴェロナール(睡眠薬)を服用したためである。亡くなったのは5日後の7月19日。時にマルト49歳であった。

6. 労働・社会運動の女性活動家たち

新時代の到来を告げた産業革命は、労働者にとって思いやりがある事象とはいえなかった。よりすくない人員で従前と同様の作業を行うも賃金は低くなり、人々がこれまで考えていたよりも労働環境が改善されたとはいえなかった。19世紀末に生まれいずる労働組合に加入する労働者は当時きわめてすくなかったが、そこにはジャンヌ・ブーヴィエの姿があった。

ジャンヌ・ブーヴィエ (1865-1964)

ジャンヌ・ブーヴィエは1865年フランス南東部のドローム県の中級のぶどう栽培農家に生まれた。物心ついてから農園の仕事を手伝っていたが、彼女が10歳の時に聖体拝領の準備のために数カ月間母の姉妹のところに送られた。

フランスのぶどう園に壊滅的ダメージをあたえた“根アブラ虫病 (phylloxéra)”の被害の爪痕が残る時代のこと、勤勉な父はほとんど無収入となり、ために母は家計の足しにとばかりに近隣の裕福な家で手伝いをしていた。ブーヴィエ家はとにかく金が必要だった。このため、ジャンヌが11歳の年(1877年)に工場で働くようになった。1840年の法律によって一日8時間を超えて児童を働かすことを禁じられたが、子供たちが工場で職を得るには、工場主の要求を呑まないわけにはいかなかった。当時の一日の労働時間は朝5時から夕方20時まで——この間2度の食事を摂るために半時間ずつ休憩時間があつた。正味労働時間は14時間と、7割超もオーバーするのがつねであつた。それでも、ジャンヌの工事の稼ぎだけでは十分でなかったため、夜間は母親の編み物の仕事を手伝っていた。

ジャンヌを不憫に思ったのか、母は夫のもとを離れ娘とともに上京、二人はパリで家事手伝いをして生計を立てることにした。ジャンヌは奉公先をいくつも変えたが、そのなかに哲学者で経済学者のピエール＝ジョゼフ・ブルードンの子女の住まいもふくまれる。そしてそこで文豪ヴィクトル・ユゴーの姿を垣間見た。だからといって、この仕事が気に入ったわけではなく、ふたたび工場にもどつた。帽子の製造、婦人服の仕立てなどの仕事をした。そんなある日、顧客の一人がジャンヌにフェミニズム思想を語って聞かせた。これに刺激を受けてジャンヌは労働組合加入を目指すことになった。

ジャンヌ・ブーヴィエはCGT(労働総同盟)傘下の婦人服・下着工場労働組合に加入し、組合の諸委員会に熱心に参加した。しかし、白状するが、労働組合が何をしようとしているのか、正直、見当がつかなかったという。それでも彼女は疲れて下宿に帰ると、1871年のパリ・コミューンの折フランスで作られた労働歌“インターナショナル (L'Internationale)”を口ずさんだという。ジャン

ヌにしてみれば、労働組合は教育の場でもあり、そこでいろんなことを学んだ。もっとも、彼女は腕のいいお針子あったので工場主が組合加入を慰留するも最終的に労働組合員たることを選択した。

ジャンヌはやがて政治に強い関心を有する組合活動家に成長するが、当時の女性たちのなかではまれな存在であった。だから、些末な要求に終始する労組に対して、彼女は1910年に労働者年金の制定を支持した。あまりに小さな一歩であることは間違いない。そうとはいえ、無いよりはましである。

時代は下って第1次世界大戦後のアメリカでは、全米女性労働組合連盟(National Federation of Women Workers: NFWW)が全世界の女性労働者に国際会議の開催を呼びかけた。これを受けて、1919年12月ILO(国際労働機構)の会合が首都ワシントンDCで開催されるのを機に、国際女性労働者大会が開かれ、ジャンヌ・ブーヴィエはフランス代表として出席した。国際会議では女性労働者のための国際組織の創設が提案・承認され、ジャンヌは副会長の一人に選出された。

ジャンヌの国際場面での功績は多々あるが、なかでも忘れてならないのは女性労働者が妊娠したさい出産の前後6週間ずつ(計12週間)の産前・産後休暇——いわゆる産休——の取得を認めさせようとしたことである。一方フランス国内では、女性家事労働者の権利の保護を提唱した。ジャンヌの面目躍如といってよい。ところが、CGT幹部は首を縦に振らず、ジャンヌとの関係はしだいに悪化する。いわゆる“ダラ幹”——組合幹部——たちは女性労働者のセクションが「組織内組織」として独立運動するのではないかと懸念したのが主因であった。あまつさえ、彼女はCGT幹部による組合費の不正流用——時の委員長レオン・ジュオーの愛人が組合費を使って旅行していた事件——を告発した。これに対して、のちにどういう次第かノーベル平和賞を受賞するジュオーをはじめとする組合幹部は彼女を「反組合的」と断罪し除名を企てた。結局、彼女はそんなダラ幹連に愛想が付き、1925年にCGTを辞した。

もちろんだからといって、ジャンヌが社会的に抹殺されたわけではなかった。パリ市3区のレピュブリック広場とは目と鼻の先のアール・ゼメ・ティエ国立工芸院で教鞭を執るジョ

ルジュ・ルナールが彼女に社会工芸図書館でフランス下着産業とそこで働く女性労働者たちの研究に協力してほしい旨申し出た。19世紀末の農業不況期に両親を支え学校に通えなかったジャンヌはルナール教授の申し出を快諾、以後国立公文書館に通いつめて1928年に彼女の処女作を上梓した。

第2次世界大戦後もジャンヌは研究をつづけ、最晩年に著書を4冊執筆し刊行する計画であったが叶わなかった。1964年看取る人間もなく一人この世を去った。享年99歳。

リュシー・オブラック (1912-2007)

約80年前の1940年7月、ナチス・ドイツによるフランスの占領とナチス占領下のフランス中部の保養地ヴィシーに誕生した対独協力政権^{コラボラトワール}への抵抗運動(Résistance)に思いを致す時、女性たちの働きを考えないわけにはいかない。たしかにかねらの階級は、世界的ベストセラー“秘密工作員マギー・ホープ”シリーズの作者スーザン・イーリア・マクニールの喝破するように、概していえば男性のそれよりも下位で、暗号の送受信、ミーティングの設定、伝言の蒐集といった任務を遂行していた。独仏に潜入して活躍する“マギー”をふくめ女性たちが対独レジスタンス運動のなかで指導的な役割を担うことはなかったが、のちに“レジスタンスの象徴”と称されたリュシー・オブラックだけは例外、いや例外中の例外というべきであった。

リュシー・オブラックは1912年6月29日にパリに生まれ、長じてパリ北西のバティニョル師範学校で歴史や地理を学ぶ一方、1932年にはPCF(フランス共産党)系の共産主義青年同盟のメンバーとなった。彼女は卒業後地理の教員になる。それから数年後の1939年12月にレイモン・サミュエルと結婚するも夫は翌年6月ドイツ軍の捕虜となった。しかし、彼女はレイモン脱走に手を貸し、夫と再会後に二人はフランス中部のリヨンに居を構えた。その目的は“リベラシオン・シュッド(Libération Sud)”という南フランスのレジスタンスのネットワークを構築することであった。

レイモンはこの時リュシーに「自分は秘密軍事組織のメンバー」で、主な任

務はドイツ軍施設のサボタージュ（破壊活動）であると打ち明けた。だからであろう、かれは1943年3月ふたたび逮捕・拘束された。ところが、この時の罪状は“闇市場（marché noir）”での密売であり、仮に告発どおりであれば前回の罪状よりは軽くてすむと考えられたが収監はまぬかれなかった。それでも、機転の利く妻のリュシーがいなければレイモンの釈放は長引いたに違いない。

それもつかの間、同年6月21日、レイモンはレジスタンスのリーダーであるジャン・ムーランらとともに再逮捕、再収監の憂き目にあった。事態は以前よりも深刻であった。このたびは「同志」の裏切りによるもので、ムーランは拷問の末殺害され、かたやレイモンの身にも生命の危険が忍び寄っていた。しかし、ここでもまたリュシーは機転を利かせ、夫の身柄の輸送中に逃亡を企て見事成功させた。4カ月かけた作戦の成果であった。その後二人はしばし国内に潜伏し、1944年2月イギリスに渡りシャルル・ドゴールを戴く“自由フランス（France Libre）”に合流した。そして、連合軍による同年6月6日のノルマンディー上陸作戦のお蔭でリュシーは帰国しレジスタンス活動をつづけた。それから2カ月半後、パリ解放をなしとげた翌日（8月26日）、ドゴールらとともに勝利を祝してシャンゼリゼ大通りを行進した。

リュシー・オブラックは大戦後も世界平和や女性の地位向上のために精力的に活動した。もちろん、レジスタンス運動を後世の世代に伝えるための活動にも熱心であった。そうしたリュシーの半生に着想を得た映画がいくつも製作された。例えば、ジャン＝ピエール・メルヴィル監督、シモーニュ・シニョレ主演の『影の軍隊（*L'armée des ombres*）』（1969年）、クロード・ベリ監督、キャロル・ブーケ主演の『リュシー・オブラック（*Lucie Aubrac*）』（1997年）が、それである。

リュシー・オブラックは2007年3月14日パリ近郊のイシー＝レ＝ムリノーで94年の長寿を全うした。葬儀委員長は時の大統領ジャック・シラクが務め、ドミニク・ド・ヴィルパン首相、フランソワ・オランド社会党第一書記（いずれも当時）などフランス政界の有力者が列席した。

7. 製品開発——発明は日常生活のなかから

発明史をふり返って驚かされるのは——「それは、お前さんの見識不足のせいだ」となじられるやもしれないが——女性たちがいかに大きな役割を演じていたかということである。19世紀英国の詩人バイロン卿の子女“エイダ”ことオーガスタ・エイダ・ラヴレースは、初期の汎用計算機である解析機関の発明者として知られる。かたや哲学者のブлез・パスカルは小型電卓第1号の発明家でもあった。しかし、エイダの真骨頂は、汎用計算機がやがてコンピュータのかたちで現実化された時、単なる計算機にとどまらず、例えば芸術を生み出すツールとなり得るというアイディアの持ち主であったことである。科学史の感動的な逸話ではある。ことほどさように、日常生活のなかでも女性たちの発明のお蔭をこうむるものがすくなくない。

エリザベス・“リジー”・マギー (1866-1948)

“モノポリー (Monopoly)” というゲームを知らない人間はまずいないだろう。1935年生まれの大衆ゲームの考案者が、大不況期の犠牲者たる失業青年チャールズ・ダローというのが定説になっていた。このゲームの商標権を保有するパーカー・ブラザーズ社がいうのだから間違いあるまい。だが、それは真っ赤なウソであった。真実を知るには時計の針を半世紀ほど戻さなくてはならない。

時は1974年、ラルフ・アンスパッチなるサンフランシスコ州立大学の教員(経済学)は、“アンチ・モノポリー (Anti-Monopoly)” なる新しいゲームを考案するも、その商標権をめぐってパーカー社と裁判で争うことになった。これに対し、同社は教授先生に訴訟の取下げを求める脅迫めいた書面を送りつけたが、教授サイドはこれを峻拒、ために裁判は延々とつづいた。訴えを起こしたアンスパッチ教授の主張はただ一点、ゲームの歴史をふり返って、だれもが知っている“モノポリー”という名称の使用を認めてほしいに尽きる。

もっとも、この裁判はそんなに単純ではなかったし、藪をつつく仕儀に等し

かった。つまり、“モノポリー”なるゲームはくだんの失業青年が考案したものではなく、“リジー”ことエリザベス・マギー（1866–1948）が19世紀アメリカの経済学者ヘンリー・ジョージの経済政策——その名にちなんで“ジョージ主義（Georgism）”——をもとに考案した教育的・啓蒙的ゲームであった。それによると、くだんの経済学者は私有財産をベースとしつつも、土地は人類共通の財産であり、諸税を廃止、地価税一本とすべきであると提唱した。リジーはかれのアイディアに着想を得て“地主ゲーム（Landlord's Game）”を考案したが、ゲームの基本は“モノポリー”と同様である。いや、“モノポリー”の基本は“地主ゲーム”と同じである。ともあれ、彼女は1904年にゲームのpatentを獲得し、ゲームを売り出したのである。

ここからが本論である。すなわち、デラウェア州のアーデン村で、村人たちがマギーの考案したのとそっくりのゲームを作りこれを“モノポリー”と呼び、ゲームに打ち興じていた。その後、ニュージャージー州アトランティック・シティのクエーカー教徒たちがこのゲームを受け継ぎ、ゲームのルールを洗練しより精巧にした。そしてこれがやがてフィラデルフィアのクエーカーの兄弟姉妹たちの手に渡ったといわれ、この地のある夫婦がかのチャールズ・ダロー青年にこのゲームを伝授したしだいである。

そのダローであるが、かれはこのゲームが「当たる」と見付け、あるデザイナーにもっと見栄えの良いゲーム盤のデザイン・製作を依頼し、できあがったゲームをかのパーカー社などに持ち込んだ。当初は渋ったパーカー社ではあるが、ダローからゲームの特許権を買い取った。それから同社は1935年12月数週間の交渉の末、リジー・マギーから当時の価格で500ドルを支払ってゲームのpatentを購入している。パーカー社はゲームの本当の作者を知っていたのであるが、そのことを長い間語ろうとしなかったのである。

それから半世紀近く経った1979年、アメリカ連邦最高裁判所はアンスパッチ教授の主張を認めて“モノポリー”の名称の使用権を認める判断を下した。長引く裁判の費用を捻出すべく借金に借金を重ね、これを嫌気した妻からは三下り半を突き付けられ、一時は八方塞がりだった教授先生は、最高裁判決のお蔭で

山のようなお金を手にした。ばかりか、エリザベス・“リジー”・マギーのアイディアを忠実に活かしたゲーム——“地主ゲーム”の販売権をも獲得した。

メリタ・ベンツ (1873-1950)

毎朝コーヒーを飲む時、電動カフェテリアか紙のコーヒーフィルターを使う。このフィルターの特許は1908年6月ドイツ南東部のザクセン州の州都ドレスデンの主婦メリタ・ベンツが申請したものであった。ドイツでは古くから、茶こしに細かく挽いたコーヒー豆を入れ熱湯を注いで濾しコーヒーを淹れていた。だが、このドイツ人主婦に限らず、当時の女性の多くはコーヒーカップの底に残るコーヒーの滓やコーヒーポットの面倒な洗浄にウンザリしていた。

メリタ・ベンツはこれを解決する試みを何度もくり返したあげく、1908年のある日、吸水性のある一葉の紙を折りたたみ、これをハンマーと鋏で穴をあけた金属の容器のうえに乗せてコーヒー粉を入れ熱湯を注いでみた。淹れ立てのコーヒーはそれまでよりは苦くはなかったが、後片付けは楽だった。それから友人の助けを借りて何度か試飲をくり返して完成させたのが、ペーパードリップ・システムである。彼女は完成品の特許を申請し、半年後にメリタ・ベンツ社を設立、自ら社長に就任した。社員は1906年に結婚した夫のヒューゴ、のちにホルストとヴィリーという二人の息子が加わる。

メリタ・ベンツは1873年ドレスデン市のアマリー・リープシャーに生まれた。父は書籍出版業、祖父はビール醸造業を営んでいたというから、彼女は「門前の小僧習わぬ経を読む」さながらに、物心つく前から身体で商いのコツを学び知ったのだろう。メリタ社創業の翌年、彼女の画期的アイディアはライブチッヒで開催された商業見本市で来場の人びとの好評を博した。これを受けて、彼女は自宅の一部を改造してペーパーフィルターの製造を開始したが追いつかず、1912年にドレスデン市内に工場を建設してペーパーフィルターの量産体制の第一歩を踏み出した。それから10年、いまや万民周知の赤と緑の箱にペーパーフィルターを入れて売り出し、他社製品と区別するようになった。

なお、株式会社カリタ社は、メリタと社名こそ似ているが縁もゆかりない、

暦とした日本の会社（本社・神奈川県横浜市）である。

メリタ・ベンツは画期的なアイデアの持ち主であったが、それ以上に歴史に残る立派な経営者といってよい。すなわち、目先の利害にとらわれず、週5日労働制の導入、年3週間の有給休暇取得の義務化、クリスマス期の賞与の支給など労働条件の改善に意を尽くした。初代女社長は1950年に亡くなるが、会社はその後にも発展につぐ発展をとげ、いまでは年間1000億のペーパーフィルターを世界各地で販売する押しも押されもせぬ大企業である。

アイダ・ローゼンタール (1886-1973)

アイダ・カナコヴィッチは1886年1月9日帝政ロシア末期のベラルーシはミンスクで生まれた。7人の子供のなかの最年長であり、物心つく頃には家計を支えるために働かなければならなかった。実際、両親は長女をポーランドに送り婦人服製造工場のお針子の修行をさせることにした。彼女はそこで仕事を習得するだけでなく、ウィリアム・ローゼンタールという青年と出会い婚約、1906年にアメリカに移住するべく大西洋を渡った。

アイダは無事アメリカの土を踏むことができた。かたやウィリアムは肺結核を患いサナトリウムで長く暮らすことになる。慣れない地で慣れない言語（英語）を使つての生活ではあったが、アイダは雑誌とくにモード雑誌をよく読み、やがて服飾デザイナーを目指すようになる。幸いアイダには頼りになる友人エニド・ビセットがいた。彼女はアイダのオリジナルドレスを売り出すために尽力したが、それはのちに二人のビジネスパートナーとしての絆を深めていくきっかけでもあった。

そうこうしているうちに第1次世界大戦が勃発、当初中立を保っていたアメリカは英仏連合軍に味方して参戦するや、時の政府は女性たちのコルセット離れのなりゆきを注視していた。ありていにいえば、女性たちが鉄製の金具を使って生産されたコルセットを身に付けなくなることは政府にとって歓迎すべきことであった。鉄は戦争継続にとって必要不可欠だったからである。

同じ頃、一人の女子学生、のちの女性発明家カレス・クロスビーは買ったば

かりのドレスにフィットしないコルセットのために困り果てていた。そこで彼女はハンカチーフを折りたたんで胸に当て、つり紐を使って背中ですき掛け（十文字に交差）して両肩に回し固定することを思いついた。これこそ、のちに“ブラジャー (brassiere / soutien-gorges)”と称される女性用下着のアイディアに等しかった。しかし、このアイディアには一つ、しかも致命的な弱点があった。いわゆる貧乳女性向きではなかったことである。

アイダとエニドは顧客たちには解決策をもとめられた。そこでまずかれらの思いついたことは、ドレスに異なるサイズの胸当てを縫い込む製法であった。だが、胸当てを縫い込むゆりのないドレスにはフィットしない。技術的にいえば、ブラジャーに相当する布地を縫い込む余裕をドレスに持たせる必要があったが、アイダをはじめドレスメーカーやデザイナーにはそのような発想をもった人間はいなかった。第一、布地の無駄使いである。

サナトリウムを出たり入ったりのウィリアムが全快してもどってきたのは大戦直後であった。これを機に、かれらは自分たちの役割分担を見直すことにした。すなわち、エニドは販売、アイダは経営と財務、そしてウィリアムはデザイン——という具合に。新デザイナーはただちに、アイダの発想を一步進めて異なるニーズ（妊娠や授乳など）によって女性の乳房を押し上げ支えるための下着を考案した。ついで、現在ならだれもが知る標準的な（ブラジャーの）カップサイズを定めた。こうして誕生した女性用下着は1925年、“メイデンフォーム (Maidenform)”のブランドで売り出された。かれらは画期的な下着の販売のためにニュージャージー州北東部のペーヨーンに1号店をオープンした。店内は初日から買い物客であふれ返り、新製品は飛ぶように売れたという。

だが、1930年代に入って景気が低迷、かれらのビジネスは転換期を迎える。エニド・ビセットが引退し、残ったローゼンタール夫妻はドレスメーカーを廃業しメイデンフォーム（女性用下着の企画・製造・販売）の経営に特化することとした。その甲斐あって、同社は第2次世界大戦中の消費者の儉約と買い控えを耐え忍び、戦後ふたたび成長をとげるが、そのさい二つの世情がかれらのビジネスと製品の販売を後押しした。

すなわち、一つはベルエポック期 (Belle Époque) の女優たちが身に着けていたゆったりしたモード——戦時中の全米愛国婦人会に組織された婦人連の忌み嫌ったフランス人デザイナーのクリスチャン・ディオールの“New Look”の影響があるとされる——のリバイバル (ただしコルセットを装着しない)、いま一つは広告業の発展にともなう大量生産・大量販売時代の到来である。下着メーカーは販売促進のために、従前は目にすることのなかった優美な下着を身に着けた、現代の“ヴィクシーモデル (Victoria Secret's models)”を彷彿とさせるトップ・マヌカンを起用したポスターを製作し世の女性たちに見せつけたのである。むろん、はじめての試みであったが、こんなキャッチコピーがかれらの心を引き付けた——。曰く、“I dream . . . in a Maiden Bra.”

メイデンフォーム社は創業以来、アイダの夫ウィリアムが社長の椅子に就いてきたが、かれが1953年に亡くなったのちは、アイダがこれを引き継いだ。爾来20年、1973年にアイダは何一つ思い残すことなくこの世を去った。時に87歳であった。

結びにかえて——ベアトリス・クレイグのインタビューに寄せて

以上、20人の女性たちの、ある者は経済学者や経営学者としての、またある者は起業家・経営者、銀行家、政治家や社会変革者としての生きざまや功績を紹介してきた。もとより取り上げるべき女性たちはこれに尽きるわけではない。カナダ・オタワ大学名誉教授のベアトリス・クレイグ (歴史学) らの優れた研究業績により多くの女性たちが発掘・再評価されたが、それはクレイグ自ら認めるように氷山の一角にすぎず、いまなお歴史の闇に埋もれたままの女性たちが星の数ほどいるという (p. 42)。

それでは経済、とくに経済の歴史はなぜ彼女たちをかくまで無視しつづけたのであろうか——との問いに対する答えは、存外、単純である。女性たちに関心になったからである。だからこそ、改革や変革を目指した女性たちを発掘し研究するには経済史から社会史や社会経済史へと目を転じる必要がある。実際

にも1960年代末以降、女権拡大運動に象徴されるフェミニズムの研究と並行して、働く女性すなわち工場労働者や家事労働者や事務員、さらに自由業者などの発掘調査を踏まえた歴史研究が進み、かれらの現実社会におけるありようが漸次明らかになりつつあるが、それはまた女性史研究の一大転換を意味する。

クレイグによると、女性史家たちの第一世代は企業の経営トップにはまったくといっていほど関心がなかった。経営者は、たとえそれが女性であろうと、資本主義社会の潜在的搾取者であり、労働者の敵だという認識であった。ただし、女性経営者の研究は1990年代になるまで待たねばならなかった (Idem)。また、こうした研究者のなかには、企業とは一義的には大企業のことであり、中小企業や家族または同族企業は過去の遺物として切り捨てられる傾向があった。しかし、家族企業はもとより、昨今スタートアップ (start-upper) や中堅・中小企業がじつは高収益でダイナミックかつ革新的企業の一角を担っているという事実をつきつけられて従前の見方を改めざるを得なくなりつつある。そのことはまた、経営トップに君臨する女性たちの出現とかれらの経営モデルが男性中心の経済史の、ひいては経営史や企業史の見直しを要請するものであることを女性史家たちに承服させるきっかけともなった (Idem)。

その一方で、女性労働組合員や非政府組織 (NGO) に属する女性たち、とりわけこれらの分野で働くリーダーや管理職の研究がさほど進んでいないという批判があるにはある。だが、それは誤解である。第一、労働組合員それ自体は経済主体ではない。かたや、NGOの代表ともいえる「社会的企業 (entreprise sociale)」の研究は緒に就いたばかりである。足りないのは、企業のマネージング、人事、財務・経理、原材料の仕入れや財・サービスの販売に対して責任ある立場の女性たちの実証研究である。しかもそうした研究は、18世紀来の慈善団体や19世紀から20世紀初頭にかけてアメリカの大都市で数多く見られた低所得地域での福祉施設 (settlement house) などの組織・機構を管理・運営する女性たちの歴史研究とも密接に関連する分野である。これらの施設は託児所、幼稚園、屋内体育館、夜間学校などを併設していたが、女性たちはここでも多大の貢献をしてきたのである (Idem)。

それにもかかわらず NGO のような機関の研究が経済学や経済史の分野で盛んでなかったのは、こうした組織が経済学者や経済史家にとっては非市場的組織であり、ために経済研究の対象たり得ないとする考え方が幅を利かせてきた結果であった。経済理論とはおよそ市場の理論でなければならないからである。しかるに、社会史や社会経済史や政治史の研究者は、そのような組織・機構の機能や役割の分析にとどまらず、政治や政治活動にさまざまなインパクトをあたえるものと位置づけ調査・研究を行ってきた (Idem)。それゆえ、当面は両者がたがいに共通の視点でこれらを研究することはないであろう。

クレイグは独断的思想や狭隘で硬直的なイデオロギーによってではなく、経済・政治・社会の歴史展開や関連する資料・データにもとづく女性史研究の必要性を説く (Idem)。筆者も同感である。だが、これをさらにつき詰めていけば、女性史研究にとってフェミニズムとは理念なのか、あるいは思想またはイデオロギーなのか、そして仮に前者の理念であるとすれば、はたしてどのような程度、形態において維持・発展されるべきであるのかという問題に立ち至らざるを得ないのであるが、クレイグはこうした問いに何も答えてくれない。

そうだとしても、クレイグはある意味では正しいと考える。わが国ではさほど重視されないが、フェミニズム、フェミニストといっても欧米諸国では 1960 年代このかた一枚岩ではなくなり真っ二つに割れている。その最大のポイントの一つは、“セックスワーカー (sex worker)”——わが国でいう“性風俗従事者”——をめぐる評価にあり、これを性的搾取の犠牲者とみるか、それとも主体的行為者とみるかというところに行き着く。それぞれの支持者の陣営が今日に至るもたがいに反目し合い歩み寄る気配さえないのは悲しいことである。

そういった筆者をフランス人の友人がなじったことがある。曰く、これら二つの陣営は「当面歩み寄ることも和解することもない。もちろん、フェミニズムは昨日今日に生まれた理念ではないし、19 世紀このかた思想的にも実践的にも評価されてきた。ところが、“フェミニスト”を自認する活動家たちにはいろんな種類があり、要注意だ。無防備で近寄るととんでもない静いに巻き込まれ、手負いになる虞れがある。もしもお前さんがお前さん自身の働く女性としての

“セックスワーカー”への認識を揺るぎないものだというのなら話は別だがね……」。わが友人のご説はもっとも、ぼーっとして生きてきた筆者といえども、爾来、警戒するようになった。

だから、筆者の恩師・櫻井毅先生のもとで同僚たちと訳出した『女性経済学者群像』のなかで、その名前さえ知らなかったバーバラ・バーグマンを分担し拙訳が世人の目にふれるようになってからのこと、さる研究者が訳者（筆者）を「フェミニスト経済学者」と紹介している——悪意からでないことは承知する——と友人が知らせてくれて、正直、意外であった。たしかにアメリカでは知名度の高い研究者であり、かつ“元祖フェミニスト・エコノミスト”と称されたバーグマン研究の論文をこの国で紹介したのは筆者がはじめてである（そしておそらく最後であろう）。しかしながら、筆者が“フェミニスト・エコノミスト”だからというのではなく、たまたま仕事で御鉢が回ってきただけである。筆者のモットーをいえば、不当に差別され抑圧された弱い立場の人間には、それが男性であろうと女性であろうと、白人であろうと筆者のような有色人種であろうと、はたまたいかなる神・仏を信じようと信じまいと、手を貸し力になることを厭わないものの、その対極にある人種差別主義者（左右の民族主義者をふくむ）、性差別主義者や年齢差別主義者には間違っても与するものではない。こんなことをわざわざ断らなければならないおのれ自身を不憫とすることがある。

いま一つ、わが国の場合、“フェミニスト”は男女同権論者、女権拡大論者、女性解放論者といった理念的定義のほか、筒井康隆の『欠陥大百科』に倣った定義もまた可なりと考える。すなわち、1960年代のウーマンリブ（women's liberation movement）の二番煎じの信奉者またはその活動家を気取るヤツ、女性と見ればだれかれなく妙に遜^{へりくだ}るも下心がありありのいかがわしいヤツ、または女性を大切に扱うフリをするヤツ、といった塩梅である。もとより、筆者が「いかがわしいヤツ」であることは否定しようがないが、さりとて「女性と見ればだれかれなく妙に遜」ったり、「女性を大切に扱う」フリをした覚えはない。第一、それが女性だからという理由でいついかなる場合であろうと大切にしたり味方したりしたこともなければ、そのようにしなければならないと考えたこ

とはただの一度もない。反対に、明らかな「獅子身中の虫」と見做せば男女の見境なく容赦せず踏み潰したことは一再ならずある。その限りでいえば、筆者は“フェミニスト”ではなかったし、いまでも違うと断言できる。

クリスチャン・シャヴァニユウのレポートをきっかけに、ベアトリス・クレイグの研究に目を通してこれを評価するに至った一半の理由は、彼女があくまでも歴史実証主義に徹した研究を世に送り出したことである。そこには独断の思想や狹隘で硬直的なイデオロギー的主張とは無縁の、真実を見抜く鋭い眼力があると感じとった。筆者があえてシャヴァニユウのレポートを紹介したゆえんである。

参考文献

- Benmebarek, Roger [2010], “Naffisa Sid Cara, première musulmane au gouvernement de la République”, *Cahier de la Mémoire*, n° 3.
- Bertin, Célia [1999], *Louise Weiss (Mémoires – Témoignages – Biographie)*, Paris, Albin Michel.
- Chavagneux, Christian [2020], “Ces femmes qui ont transformé l’économie et ont été oubliées”, juillet / août, *Alternatives Économiques*.
- Craig, Béatrice [2019], *Les femmes et le monde des affaires depuis 1500*, Québec, Pu Laval (Presses de l’Université de Laval): originally published as *Women and Business since 1500: Invisible Presences in Europe and North America?*, London / New York, Red Globe Press (Macmillan International Higher Education), 2015.
- Debré, Jean-Louis et Valérie Bochenek [2013], *Ces femmes qui ont réveillé la France*, Paris, Fayard. 西尾治子他訳『フランスを目覚めさせた女性たち』, バド・ウィメンズ・オフィス, 2016 年。
- Déjardin, Camille [2019], *Madame Blakey: Une femme entrepreneure au XVIII^e siècle*, Rennes, Presses Universitaires de Rennes.
- Dostaler, Gilles [2012], *Les grands auteurs de la pensée économique*, Alternatives Économiques Poches n° 57, Paris, Alternatives Économiques.
- Downey, Kirstin [2009], *The Woman Behind the New Deal: The Life of Frances Perkins, FDR’s Secretary of Labor and His Moral Conscience*, New York, Nan A. Talese: paperback, Anchor Books, 2010.
- Evans, Kate [2013], *Red Rosa: A Graphic Biography of Rosa Luxemburg* (Edited and with afterword by Paul Buhle), London, Verso.
- Garett-Scott, Shenette [2019], *Banking on Freedom: Black Women in US Finance before the New Deal*, New York, Columbia University Press.
- Hau, Michel [1993], “Naufrage et redressement d’une grande entreprise métallurgique”, *Économie et Société*, n° 1.
- Igersheim, Herrade et Charlotte Le Chapelain [2019], “Women leaders in Industry in Nineteenth Century France: The case of Amélie de Dietrich”, Beta documents de travail n° 2019–35,

- septembre.
- James, Harold [2006], *Family Capitalism: Wendels, Haniels, Falcks, and the Continental European Models*, Cambridge, MA, Belknap Press.
- Kahn, Zorina [2015], “Invisible Women: Entrepreneurship, Innovation and Family Firms in France during Early Industrialization”, NBER Working Paper No. 20854, Cambridge, MA.
- Kelly, Kate [2019], “Ida Rosenthal: Pioneered Bra Industry with Maidenform”, *America Comes Alive*, 16 September: <https://americacomesalive.com>
- Lefévre-Filleau, Jean-Paul, [2020], *Femmes de la résistance*. Paris, Editions du Rocher.
- Le Mao, Caroline [2006], “Une redoutable femme d’affaires: la première présidente Olive de Lestonnac (1572–1652)”, *Annales du midi*, tome 118, n° 253.
- Le Mao, Caroline [2010], “Les origines méconnues de Château Margaux”, dans: Caroline Le Mao et Corine Marachet (sous la direction), *Les élites et la terre*, Paris, Arman Colin.
- Luxemburg, Rosa [2012], *The Accumulation of Capital* (Routledge Classics), New York, Routledge: originally published in German 1912 as *Die Akkumulation des Kapitals*; English Edition first published 1951. 長谷部文雄訳『資本蓄積論』(上, 中, 下), 岩波文庫, 1934年。
- Marçal, Karine [2019], *Le dîner d’Adam Smith*, Paris, Lea Arènes: Traduit grâce au soutien du Swedish Arts Council. Edition originale parue aux Albert Bonniers Förlag, Stockholm, 2012.
- Maruani, Margaret et Monique Meron [2012], *Un siècle de travail des femmes en France*, Paris, La Découverte.
- Moses, Claire [2018], “Overlooked on More: Melitta Benz, Who Invented the Coffee Filter”, *The New York Times*, 5 September.
- Parker Follett, Mary [1993], *Dynamic Administration: The Collected Papers of Mary Parker Follett*, Eastford: CT, Martino Fine Books.
- Perkins, Frances [2011 (1946)], *The Roosevelt I Knew* (with an Introduction by Adam Cohen), London / New York, Penguin Classics.
- Perrot, Michelle [2020], *Les femmes ou le silence de l’histoire*, Paris, Flammarion.
- Pilon, Mary [2015], *The Monopolists. Obsession, Fury and the Scandal behind the World’s Favorite Board Game*, New York / London, Bloomsburg.
- Polkinghorn, Bette and Dorothy Lampen Thomson [1998], *Adam Smith’s Daughters: Eight Eminent Women Economists from the Eighteenth Century to the Present*, Aldershot, Edward Elgar Publishing. 櫻井毅監訳『女性経済学者群像——アダム・スミスを継ぐ卓越した八人』御茶の水書房, 2008年。
- Robinson, Joan [1967], *An Essay on Marxian Economics*, London, Palgrave Macmillan. 戸田武雄, 赤谷良雄訳『マルクス経済学』有斐閣。
- Strange, Susan [1983], *Casino Capitalism*, Oxford, Blackwell Publication (paperback). 小林襄治訳『カジノ資本主義——国際金融危機の政治経済学』岩波書店, 1989年(2007年, 岩波文庫)。
- Strauss, Delphine [2019], “Nobel-winner Esther Duflo on what mainstream economics got wrong”, December 5, *Financial Times*: FT Magazine 〈Women in 2019: The Game Changers〉.
- Winkler, Evelyne [2017], *Louise Weiss: Une journaliste-voyageuse, au coeur de la construction européenne*, Paris, L’Harmattan.